2022 年度

きょう育の和センター報告書

No. 4

和歌山信愛大学

目　　次

１．はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

２．2022 年度きょう育の和センターの活動報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

３．学生地域ボランティアサークル
（1）わくわく子どもの秘密基地　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
（2）夏休み小学生預かり教室サマースクール　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

４．島ものづくり塾　－実験「野菜や果物の科学－その性質を調べよう－」－　・・・　8

５．日高川町との協定締結　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9

６．和歌山信愛大学子どもフェスタ
（1）和歌山信愛大学子どもフェスタ in 本町 2022　・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１
（2）和歌山信愛大学子どもフェスタ in 有田 2023　・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３

７．正課授業の取り組み
（1）ボランティア実習　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６
（2）地域連携フィールド学習　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１８
（3）地域力再生論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２３
（4）地域連携フィールドゼミナール　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２４
千森督子ゼミ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２５
森﨑陽子ゼミ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２９
森下順子ゼミ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３３
小田真弓ゼミ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３７
江口怜ゼミ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４１

８．おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４５

１．はじめに

開学当初より、地域社会に開かれた大学として、さまざまな地域連携や産学官連携の総合窓口としてきょう育の和センター（地域連携委員会）を設置した。本学が行うきょう育の和センター活動は、学生と教職員が一体となって、大学がある和歌山市をはじめとする市内や県内において、家庭と地域社会、及び保育所・幼稚園・認定こども園といった横の連携、保育所・幼稚園と小学校の教育を繋げる縦の連携を踏まえた、子育て・子育ちを総合的に支援できるよう行う。子ども教育に特化した本校ならではの子どもに関わる課題・ニーズを的確に把握して地域社会の発展向上に貢献し、大学と地域が相互につながりあい、協働して取り組み解決していくことを通して、学生が地域から学び、それを広く社会に活かす力が育まれ、本学の教育研究活動の推進が図られるものと考える。

これまでの活動内容は、「きょう育の和センター活動報告書 No.1～3」に掲載したように試行錯誤しながら多岐にわたる活動を行った。開学一年目ということで、学生は１年生のみでどこまでやれるのか未知数であった。しかし、コロナの感染拡大により自粛ムードが県内外に生じ、きょう育の和センターの活動がかなりの制約の中で実施せざるをえない状況が続きました。

それに変わるものとして、自粛期間中子育て世帯の家族が家庭で過ごすことが多いことを考慮し、「信愛大学発！お家でいきいきタイム～家庭で楽しく過ごせる動画」を配信することにした。その成果は和歌山信愛大学のホームページ、きょう育の和センターから発信していますのでご覧下さい。

昨年度より、和歌山県から依頼を受け子育て支援研修の事務局が本学に移った。この研修は子育てに関わるいろんな機関の方々に専門知識や心構えなどを集中講義するもので、大変責任の重い業務と言える。きょう育の和センターとして、全力を挙げて取り組んだ。

また、一昨年より有田市と本学が連携協定を結び、今年度は有田市の保育園に勤務する保育士を対象に保育士研修として、２名の教員が講義を行った。２月には２回目の子どもフェスタを有田市で開催した。

その他の活動として、学生地域ボランティアサークル、ぶらくり丁活性化事業、正課授業の取り組みとして、ボランティア実習、地域力再生論、地域連携フィールドゼミナールの学びの様子が報告されている。ぜひ、ご覧になり忌憚なくご意見・ご指導いただければ幸いです。

和歌山信愛大学きょう育の和センター
センター長　戸澗幸夫

２．2022 年度きょう育の和センターの活動報告

（１）本町子どもフェスタ

オープンキャンパス同時開催とした本町子どもフェスタ

日時　10 月 15 日（土）13:30～15:30

会場　和歌山信愛大学　体育館・３号館

参加者　0 歳から 12 歳の子ども 63 名　保護者 43 名　合計 106 名

えんがわハウスのシャツターの絵画制作、わかまなびサークルによる子どもの遊び場コーナー、ぶらくりの素敵博物館、工作広場での活動などが行われた。それぞれのブースで学生が主体的に創意工夫した内容で、全力で来館者をもてなす姿は他大学では経験できない 素晴らしいものと考える。１年生から４年生までが協働作業する中で、先輩の子どもへの対応や声かけにリスペクトを感じるような学びが出来たという声が多くあった。

（２）動画配信

コロナ禍の自粛生活を生き生きと生活をするための、子育て・子育ち支援の一環としての動画を配信を今年度も行った。紙パク人形劇、作って遊べる工作や年代に合わせた運動など学生が内容を検討し、動画を作成した。

（３）有田市と本学の連携協定に関わる活動

①有田市立保育所勤務の保育士研修

１月 14 日（土）講師　桑原義登教授

演題　「相談支援の基礎的な枠組み」

１月 21 日（土）講師　戸澗幸夫教授

演題「豊かな感性を育む手立て」

実技演習　共同制作による現代アートを学ぶ

②子どもフェスタ in 有田 2023

共催　有田市・和歌山信愛大学

日時　2023 年 2 月 19 日（日）10:30～12:00

場所　有田市文化福祉センター

活動内容

ア　子育て広場

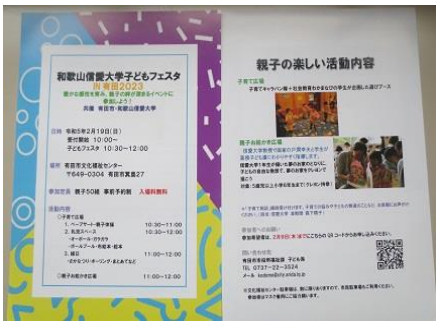
・ペープサート・親子体操

・乳児スペース　　絵本の読み聞かせなど

・縁日

イ　親子お絵かき広場　夢のお家を描こう　オリジナルマスク作り

ウ　森下順子准教授による「子育て相談」



（4）子育て支援員研修総括

和歌山信愛女子短期大学と和歌山信愛大学において、2018 年から 2022 年の 5 年間、和歌山県の委託を受け、子育て支援に関わる地域の方々への子育て支援員研修を実施してきました。

子育て支援員研修は、子ども・子育て支援法（平成 24 年法律第 65 号）に基づく給付又は事業として実施される小規模保育、家庭的保育、ファミリー・サポート・センター、一時預かり、放課後児童クラブ、地域子育て支援拠点等の事業や、家庭的な養育環境が必要とされる社会的養護の支援となる人材を確保すること、また、これらの担い手となる子育て支援員の資質の確保を図ることを目的として実施されています。

和歌山県においても、保育や子育て支援の仕事に関心を持ち、それらの仕事に従事している方や希望する方を対象に「和歌山県子育て支援員研修」を実施しています。大学が中心となって子育て支援員研修の企画・運営を行い、「質の確保」にこだわったことは、和歌山県の強みになると思います。

地域の皆さまのご理解とご協力により、毎年、定員を超える応募がありました。子育てを支えたい、子どもの豊かな育ちのために力になりたいという想いを持たれた多くの地域の方々がおられました。子育て支援の充実は、これからもより一層重要になる中で、地域の力は子育て支援の要となることでしょう。

これまで、本事業にご協力・ご参加くださった皆さま、そして、本学による子育て支援員研修の企画・運営にお力添えをいただいた和歌山県とスタッフの皆様に心から感謝するとともに、和歌山県の子育て支援が益々充実し、子どもの笑顔が一杯になることを願っています。

（5）その他の活動

本町を始め、県内の各地域よりボランティア活動の学生参加の要請が多くあり、学生の支障のない範囲で、きょう育の和センターを通じて協力する。

３．学生地域ボランティアサークル

（1）わくわく子どもの秘密基地（学園祭）

１．メンバー

指導教員：森下順子

学生：4 年（代表）柏田詩乃　（代表）門戸麗伊奈　（副代表）久保田真以　（副代表）川野ひなた
岩上佐恵　太田真生　大平桃子　栗山すみれ

3 年（代表）田中美羽　（代表）原朱蓮　（副代表）溝脇知紘　（副代表）丸尾結郁
中尾美羽　山本愛優　山本菜摘　湯川紗季

2 年　尾原沙都　神谷朋果　滝尾有彩

1 年　堀内美鈴　宮崎姫花

２．活動内容

（1）概要

開催日：2022 年 12 月 4 日（日）

開催地：和歌山信愛大学 3 号館　保育実習室・Lans2

参加人数：学生…21 名

内容：コロナ禍でお出かけをすることが難しい中、水族館の雰囲気を子ども達に楽しんでもらいたいと考え、水族館をテーマに「子どもの秘密基地」を作りました。

① 魚釣り　②お絵描き　③ボールプール　④玩具遊び（マグネット、積み木、ブロック）
⑤スノードーム作り　⑥スイミーの壁面製作

（2）各活動内容

①魚釣り

【内容】ブルーシートを海に見立てて磁石を付けた魚を散りばめる。

【感想】1 つ魚を釣ることができると、魚釣りの楽しさを感じ、集中して遊びに取り組む姿を見ることができ、喜びを感じた。

②お絵描き

【内容】大きな模造紙にクレパスを使って絵を描く。

【感想】大きな模造紙に、思い思いに絵を描く姿を見ることができ、大きな模造紙を用意してよかったと感じた。

③ボールプール

【内容】ボールプールに入って、柔らかいボールで遊ぶ。

【感想】乳児を中心に夢中になって遊ぶことができていた。

④玩具遊び（マグネット、積み木、ブロック）

【内容】ホワイトボードにマグネットを張り付ける。
積み木を高く積み上げたり、形を作ったりする。
ブロックで好きな形を作る。

【感想】玩具の誤飲を防ぐために大きいサイズの玩具を用意することで、安全に配慮することができた。

⑤スノードーム作り

【内容】好きな飾り（ストロー、ビーズ、モール）を選び、ペットボトルの中に入れ、オリジナルのスノードームを作る。
洗濯糊と水を 6：4 で割った液は、安全のため、学生が入れる。

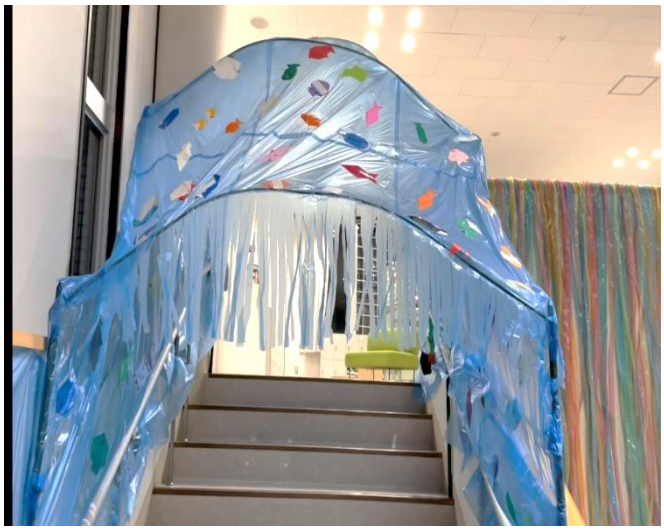
【感想】自分だけのデザインのスノードームを作り、達成感や満足感を得ている子どもの姿を見ることができた。

⑥スイミーの壁面製作

【内容】好きな色の折り紙を選び、折り紙をちぎり、魚の台紙にのり付けをする。できた魚は、持って帰るか、壁面に貼るか選択する。

【感想】好きな色の折り紙を、好きな大きさに手でちぎり、思い思いに台紙に貼ってできた魚は、一人一人の子どもの個性が出ていて、活動の楽しさが伝わるような壁面が出来上がった。

↓お魚トンネル



↓わくわく子どもの秘密基地の入り口

（3）振り返り

3 年ぶりに学外の方を招く学園祭を開催することができ、地域の親子と学生とで交流を図ることができた。1，2，3 年生にとっては初めての学外の方を招く学園祭であり、4 年生にアドバイスをもらいながら開催に向けて準備し、当日も子ども達や保護者の方々と積極的にコミュニケーションを取ることができた。

学園祭を通じて地域の親子と交流し、地域と大学との繋がりを感じることができた。これからもコロナ禍の状況と向き合いながら試行錯誤し、地域の親子と関わる活動を行っていきたい。

（2）夏休み小学生預かり教室サマースクール（島精機企画運営）

<基礎情報>
企画名：ウォーターバトル!!
指導教員：森下順子
メンバー：滝尾有彩・尾原沙都・神谷朋果（以上２年）
　　堀内美鈴・宮崎姫花（以上１年）

１．はじめに
　水鉄砲は、楽しさや面白さだけでなく、夏の暑さから水の冷たさや気持ちよさを肌で感じられる。その水と触れ合う体験は、子どもにとって大切な思い出の１つになる。そこで大人数でゲーム性のある水鉄砲遊びを提供することで、楽しんでもらえると考え、企画を行った。企画の概要は次の通りである。

【企画内容】
開催日：8 月 19 日　　開催場所：和歌山信愛大学 運動場
内容：ゼッケンの色でチームに分かれて、チーム対抗戦で水鉄砲遊びを楽しむ。

・ウォーターバトル１
　敵側に置いてある的を先に濡らしたチームが勝ち
・ウォーターバトル２
　逃げ回る的を先に濡らしたチームが勝ち

参加者人数：46 人（1 年生 16 人、2 年生 10 人、3 年生 10 人、4 年生 4 人、5 年生 3 人、6 年生 3 人）
準備物：水鉄砲（持参物、手作り水鉄砲）、的（水性ペンで模様を描いた半紙）、
　　120 ㎝プール、バケツ

２．感想
　今回、自分たちで一から企画を考え活動を進めることが初めてだったが、予想よりも多くの子どもが参加してくれ、子どもの思いきり水鉄砲で遊ぶ姿から、楽しんでくれたと感じる。子ども同士で打ち合って楽しんでいる様子や、高学年が低学年に水鉄砲の水を補給してあげていたり、異年齢で交流している姿も見られた。企画を考えた自分たちも子どもたちと一緒に参加し、子どもに戻ったように全身服を濡らして、楽しく水鉄砲で遊ぶことができた。楽しく遊ぶ中でも、危険なことをしていないか、顔色が悪くないか等、全体の子どもの様子を見ることを心掛けた。その他、事前に熱中症対策として水分補給の時間を作ることや、日陰の位置を確保しておくこと、しんどくなったらすぐに伝えると子どもたちに声掛けを行った。

工夫したことは、遊びの説明を行う際に、大きい文字や絵で表現する視覚教材を作って分かりやすく説明を行った。また、水鉄砲で狙う的を半紙にして水性ペンで色をつけることで、濡れた際に色が滲んで、子どもが的に当たっていると分かると同時に、色が混ざり合う面白さも感じられるように工夫をした。

反省点は、水鉄砲の狙う的が半紙だったため、すぐに破れてしまいゲームの勝敗がすぐに終わってしまうことがあった。そこで、自分たちが半紙をもって走りまわることで、すぐに勝敗が決まらないようにした。次回も水鉄砲の企画を開催する際には、紙の質を変えることやゲーム性をもたせて企画を作りたいと考える。

イベント企画を通して、多くの子どもたちと関わり、実際の子どもの姿や様子から学ぶ良い機会となった。そして、子どもの楽しんでいる姿から達成感を感じることができた。また、このような機会があれば、積極的に参加して、子どもたちと関わっていきたい。

4. 島ものづくり塾　第２回講義
－実験「野菜や果物の科学－その性質を調べよう－」－

「島ものづくり塾」は、公益財団法人・島財団により 2019 年に設置されました。小学生を対象に、低学年及び高学年に分かれて、科学技術の不思議さ、楽しさ及び素晴らしさを体感し、科学技術に対する好奇心や関心が育つような講義・実験等を実施しています。2022 年 9 月 4 日(日)の第 2 回講義（低学年向け）では、本学の秋吉博之教授が講師を担当しました。

第２回の講義は「野菜や果物の科学」と題し、その性質について、次の２つの実験で調べました。

【実験１】「浮く？沈む？野菜の秘密！」

市販の野菜を準備して、水槽に入れた水に浮くか沈むかを調べました。

【実験２】「ブドウジュースの秘密」

市販のブドウジュースに炭酸水素ナトリウム（重曹）やクエン酸を加えて、液の変化を調べました。

参加した塾生の皆さんは身近な果物・野菜について、重さを測ってから水への浮き沈みを予想・実験したり、薬品を加えて色が変わったり気体が発生したりするようすを観察しました。

また、この日の講義には、本学の秋吉ゼミの有志ボランティア学生も助手として参加しました。楽しそうに実験に取り組む小学生をサポートし、日々の研究、ボランティア活動への意欲及び将来の進路にも繋がる糧とすることができました。

講義のようす

5. 日高川町との連携協定締結

日高川町と学校法人和歌山信愛女学院は、相互の発展に資するため、令和 4 年 8 月 29 日に連携協定を締結しました。町における学校教育・保育の質の向上を図るとともに、文化、教育、学術等の分野で相互に協力し、地域の発展と人材の育成に寄与することを目的とします。

日高川町と学校法人和歌山信愛女学院は、次の事項について連携・協力を図るものとします。

（1）大学等の教育・研究に関すること
（2）地域の人材育成に関すること
（3）学生の就職支援に関すること
（4）その他目的を達成するために必要と認める事項

詳しくは次のページの協定書をご覧ください。

日高川町と学校法人和歌山信愛女学院との連携に関する協定書

日高川町と学校法人和歌山信愛女学院は、相互の発展に資するため、次のとおり連携協定を締結する。

（目的）

第１条　この協定は、日高川町と学校法人和歌山信愛女学院が連携のもと、町における学校教育・保育の質の向上を図るとともに、文化、教育、学術等の分野で相互に協力し、地域の発展と人材の育成に寄与することを目的とする。

（連携協力事項）

第２条　日高川町と学校法人和歌山信愛女学院は、次の事項について連携・協力を図るものとする。

（１）大学等の教育・研究に関すること

（２）地域の人材育成に関すること

（３）学生の就職支援に関すること

（４）その他目的を達成するために必要と認める事項

（守秘義務）

第３条　日高川町と学校法人和歌山信愛女学院は、この協定に基づく活動において、相手方より知り得た秘密事項について、この協定の有効期間中及び期間終了後を問わず、第三者に対し開示または漏洩してはならない。ただし、事前に相手方の承諾を得た場合は、この限りではない。

（有効期間）

第４条　この協定書の有効期間は、協定の締結日から令和５年３月31日までとする。ただし、この協定書の有効期間満了の日の30日前までに、日高川町と学校法人和歌山信愛女学院のいずれからも改廃の申し入れがない場合は、さらに１年間延長するものとし、その後も同様とする。

（その他）

第５条　この協定に定めるもののほか、必要な事項については、日高川町と学校法人和歌山信愛女学院が協議して別に定めるものとする。

この協定の締結を証するため、本書２通を作成し、署名のうえ、それぞれ１通を保有するものとする。

令和４年８月２９日

和歌山県日高郡日高川町大字土生160番地
日高川町長
久留米 啓史

和歌山市屋形町二丁目23番地
学校法人和歌山信愛女学院理事長
森田 登志子

6. 和歌山信愛大学子どもフェスタ

○和歌山信愛大学子どもフェスタ in 本町 2022

「どんぐりの森」開催

参加者：３２組９６名　子ども６６名　大人３０名

学生　：岡田七海・柏田詩乃（リーダー）・門戸麗伊奈（リーダー）・川野ひなた
久保田真以・澤田楓香（以上４年生）
有本美緒・岡田紗季・田中美羽・原朱蓮・丸尾結郁（以上３年生）
尾原紗都　神谷朋果（以上２年生）
堀内美鈴（以上１年生）

参加人数：学生 14 名　教員２名

開催日：１０月１５日　開催地：和歌山信愛大学

内容：　縁日（魚釣り・ボーリング・ボールプール・的あて・おもちゃ）
サーキット（坂道・トンネル・草はっぱら・一本橋・でこぼこ道・蜘蛛の巣・下り道）

《 活動実績 》

（１）　サーキット

【内容】童謡「さんぽ」の歌をテーマに、①坂道　②トンネル　③草葉っぱら　④一本橋　⑤デコボコ道　⑥蜘蛛の巣　⑦下り道を設置する。

【感想】身体いっぱい動かし、何周も繰り返し走り回る姿が見られた。さらに、幅広くサーキットを楽しんでもらうことができた。

（２）　魚釣り

【内容】ブルーシートを海に見立てて磁石をつけた魚を散りばめる

【感想】一生懸命沢山の魚を採り楽しんでいる姿がみられ、また、親子で協力しながら魚を採るなどの姿が見られ、親子ともに楽しんでもらうことができた。

（3） ボーリング

【内容】ペットボトルをカラフルにするなどして、子どもの興味がでるように工夫する。
【感想】年齢や発達に合わせて距離を変え、またボールの大きさなどを変える事により、一人ひとりにあった遊び方を提供することができた。

（4） 的あて

【内容】壁にカラフルのマジックテープの的を貼り付け、同じくマジックテープの玉を用意する
【感想】好奇心の赴くまま玉を投げたり、玉の色と同じ色の的に当てたりするなどの姿が見られた。距離を変えたり、周りの子どもと協力しながらボールを投げたりするなど、主体的に遊んでいる姿を感じることができた。

（5） おもちゃ

【内容】乳児でも遊べるおもちゃを考え、また落ち着いて遊べるように机と椅子を用意した。
【感想】乳児が落ち着いて遊べるよう、多様なおもちゃを用意したことで、親子で遊んでいる姿や、おもちゃに関心をもち集中して遊んでいる姿を感じることができた。

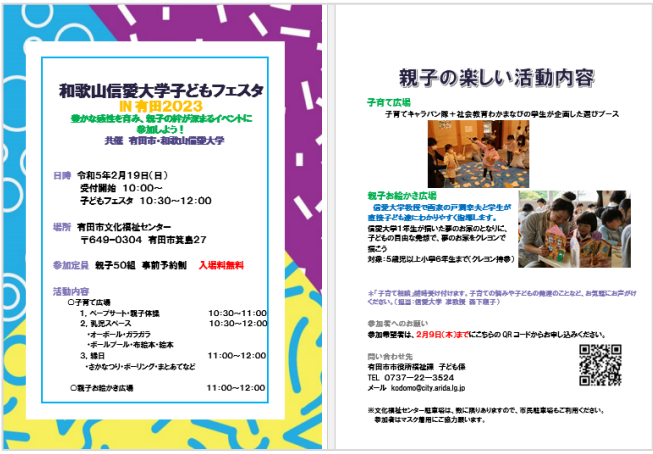
《振り返り》

一昨年行われた有田市での子どもフェスタでの学びから、今回の子どもフェスタ「どんぐりの森」に活かすことができた。沢山の親子に来ていただいたことにより、これまでよりもさらに賑やかに企画を成功させることができ、とても良い経験ができた。２つのサークルが共同して１年生から４年生の学生が参加し、子どもたちと積極的に関わることができた。子ども達との関わり方に難しさを感じている学生がいたが、４年生が子どもたちに積極的に関わる姿、保護者の方への気遣いをする姿を見て、同じように行動する学生が増えてきた。次第に表情も明るくなり、積極的に関わり、子どもたちと楽しみながら一緒に遊ぶことができた。

今回の子どもフェスタを通じて、実際の子どもたちと沢山関わり、より深く子どもの姿を学ぶことができた。また、親子の絆や、子ども同士で遊ぶ姿、保護者同士のコミュニティの場を目の当たりにし、これからもこれらの場を大切にする機会を多くつくっていきたい。

○和歌山信愛大学子どもフェスタ in 有田 2023

参加者　：３４組　９８名　　子ども４６名　　大人５２名
指導教員：森下順子
学　生　：小川海名　柏田詩乃　加藤玲央　門戸麗伊奈　栗山すみれ　澤田楓香
　　田中夏海（以上４年生）
　　杉元陽菜　田中美羽（代表）　原朱蓮（代表）　丸尾結郁　山原叶夢
　　山本菜摘（以上３年生）
　　尾原紗都（以上２年生）
　　勝丸桃花　谷畑ひな　中口愛美　藤田柚芽穂　龍ノ平美羽（以上１年生）
参加人数：学生 19 名、教員９名　有田市役所関係者８名
開催日　：2023 年 2 月 19 日（日）
開催地　：有田市文化福祉センター
内　容　：①大型絵本読み聞かせ　②親子体操　③乳児スペース　④魚釣り
　　⑤ボーリングと輪投げ　⑥的当て　⑦親子お絵描き広場
　　⑧子育て相談相談支援



《活動実績》

（１）大型絵本読み聞かせ

【内容】「ぐるんぱのようちえん」「ねずみくんのちょっき」の大型絵本の読み聞かせを行った。
【感想】ブルーシートの上に座り、親子でリラックスした状態で読み聞かせを聞いてもらうことができた。

（２）親子体操
【内容】学生が考えた親子体操「世界中のこどもたちが」を踊り、親子で楽しく体を動かす。
【感想】音楽に合わせて親子で楽しく体を動かしてもらうことができた。体操を行う事で、明るく楽しい雰囲気づくりを行うことができた。

（３）乳児スペース

【内容】オーボール、ガラガラ、ボールプール、布絵本、絵本を用意し、乳児が安全に楽しく遊ぶことができる環境を提供した。
【感想】座って落ち着いた状態で遊んでもらうことができた。また、乳児の子どもが多かったため、保護者が安心して遊びを見守ることができる環境を作ることができた。

（4）魚釣り

【内容】ブルーシートを海に見立てて磁石をつけた魚を、釣り竿で釣る。

【感想】一生懸命沢山の魚を釣り、楽しんでいる姿がみられた。また、親子で協力しながら魚を釣るなどの姿が見られ、親子で楽しんでもらうことができた。

（5）ボーリング・輪投げ

【内容】ボーリングピンを用意し、輪投げ・ボーリングの好きな遊びを選択してもらい、好きな方で遊ぶことができるように工夫した。ボーリングのボールは安全面を重視し、柔らかいボールで行った。

【感想】ボーリングでは、ボールを投げてピンを倒すことを繰り返し楽しんでいた。輪投げでは、外れても何度も挑戦し、入れることができた喜びを保護者・学生
と喜び合う子どもの姿が見られた。

（6）的当て

【内容】壁にカラフルなマジックテープの的を張り付け、その的に向かって玉を投げる。乳児から参加できるように、的の位置を低く設定した。【感想】好奇心の赴くまま玉を投げたり、玉の色と同じ色の的に当てたりするなどの姿が見られた。距離を変えたり、周りの子どもと協力しながらボールを投げたりするなど、主体的に遊んでいる姿を感じることができた。

（7）親子お絵描き広場

【内容】

・信愛大学１年生が描いた夢のお家の隣に、子どもの自由な発想で、夢のお家をクレヨンで描く。(5 歳児以上小学校 6 年生まで)

・ステンシル技法でマスク作り

【感想】クレヨンで、自分で想像した夢のお家を描くことを楽しんでいた。また、ステンシル技法を用いて、自分でデザインしたマスクを作ることを楽しんでいた。

（8）子育て相談支援

８名の保護者により相談があった。

《振り返り》

1 年ぶりに有田市子どもフェスタを、有田市役所福祉課の職員の方や有田市の保育士の方のご協力の下、開催することができた。1 年生から 4 年生の学生が協力し、本町子どもフェスタで開設した魚釣り・輪投げ・乳児スペース・的当てに加え、大型絵本読み聞かせ・親子体操・親子工作広場を開設した。親子で楽しく過ごす場づくりができたと考えている。

今回の子どもフェスタを通して、実際の子どもの姿や保護者の需要に応じて臨機応変に対応していくことの大切さを学ぶことができた。実際に、早く会場を設営することができたため、予定より早く参加者が到着しても対応することができた。また、今回出た課題がいくつかあったため、次回からの子どもフェスタに活かしていきたい。

７．正課授業の取り組み

（1）１年生必修科目「ボランティア実習」

①概要

本学では、社会に貢献する態度を身につけ、コミュニケーション力を養うこと等を目的として 1 年生対象の必修科目として、「ボランティア実習」を開講している。2022 年度は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえて、細心の注意を払いながら実施した。

②学内授業

1	4月26日（火）	授業概要説明
2	5月24日（火）	ゲスト講義①　和歌山市地域フロンティアセンター・村井センター長・水本和宏氏「地域フロンティアセンターおよび市民公益活動登録制度について」 ゲスト講義②　和歌山市子ども支援センター・川野センター長「和歌山市子ども支援センターおよびふれあい教室について」
3	6月14日（火）	ゲスト講義①　和歌山県社会福祉協議会・和歌山県災害ボランティアセンター南出考氏「社会福祉協議会とボランティア」 ゲスト講義②　海南市社会福祉協議会のご紹介
4	6月28日（火）	ゲスト講義　和歌山市社会福祉協議会「災害ボランティアって…～ボランティアを考えよう～」（ワールドカフェ）
5	7月19日（火）	各種ボランティア紹介、夏休み中の活動に関する諸注意
6	10月11日（火）	中間振り返り
7	11月8日（火）	ゲスト講義　秋月清秀氏（元和歌山県障害者支援課長）「障害を知り、ともに生きる」
8	12月13日（火）	ゲスト講義　宮本朋子氏（有田市社会福祉協議会）「「大学生」という立場から見つめてほしいこと」
9	1月10日（火）	事後振り返り（グループワーク、発表会準備）
10	1月17日（火）	事後振り返り（体験発表会）

今年度は、学内授業 20 時間、学外実習 20 時間の配分で行った。夏と冬に感染拡大があり、一部のボランティア活動が中止になったものの、和歌山県から不要不急の外出自粛の要請がなかったことから、体調管理を徹底しながら通年でボランティア活動に参加することができた。

なお、学内授業にご協力いただいた和歌山県社会福祉協議会、和歌山市社会福祉協議会、海南市社会福祉協議会、有田市社会福祉協議会、和歌山市地域フロンティアセンターをはじめ、講師の皆様・関係者の皆様には厚くお礼申し上げたい。

③ボランティア活動実績

2022 年度中、1 年生 68 名が参加したボランティア活動は 28 件で、下表の通り、和歌山市、海南市、有田市などでイベント補助や子ども食堂などの多様な活動に参加させていただいた。

	主催・依頼元	活動・イベント名	活動場所	時期
1	和歌祭実行委員会	和歌祭四百年式大祭運営ボランティア	和歌山市	5月
2	海南市社会福祉協議会	学習支援ボランティア	海南市	5月、8月、12月
3	和歌山市スポーツ振興課	第３７回和歌山市障害者卓球大会ボランティア	和歌山市	6月
4	海南市社会福祉協議会	災害ボランティア講座、災害訓練	海南市	6月、11月
5	和歌山県県民生活課	スポGOMI大会	かつらぎ町、美浜町	6月、11月
6	七曲商店街共同組合・和歌山市駅前マルシェの会	BACH TO THE 七曲市場ボランティア	和歌山市	7月
7	アルテリーヴォ和歌山	サッカーの試合運営ボランティア	和歌山市	7月、8月
8	株式会社島精機製作所	サマースクールボランティア	和歌山市	8月
9	本町地区交通安全の会	本町公園幼児プール見守りボランティア	和歌山市	8月
10	和歌山市立こども科学館	夏休み子供創作教室	和歌山市	8月
11	一般社団法人 生涯学習支援協会 藤並学童クラブ	藤並学童クラブボランティア	有田川町	8月
12	和歌山市社会福祉協議会	夏のボランティア体験学習	和歌山市	8月
13	NPO法人ふれ愛旅倶楽部児童発達支援・放課後デイサービス　パレット	遊びや学びのサポート	和歌山市	8月
14	和歌山県警警察本部少年課	少年立ち直り・健全育成ボランティア	県内	8月、9月
15	和歌山なぎなた連盟	幸村杯第7回全国高等学校男子／女子なぎなた選手権大会運営ボランティア	九度山町	8月
16	島財団	島ものづくり塾	和歌山市	8月、9月、10月
17	和歌山信愛大学	グラウンド草抜きボランティア	和歌山市	9月
18	和歌山信愛大学	和歌山信愛大学子どもフェスタin本町	和歌山市	10月
19	おのみなとこども食堂の会	おのみなとこども食堂	和歌山市	10月、12月
20	一般社団法人 市駅グリーングリーンプロジェクト	市駅”グリーングリーンプロジェクト”2022「夕暮れのシエキノカワでピクニック＆キャンプ」	和歌山市	10月
21	竹燈夜実行委員会	竹燈夜ボランティア	和歌山市	10月
22	本町地区社会福祉協議会	三世代交流会ボランティア	和歌山市	11月
23	和歌山市スポーツ振興課	和歌山ジャズマラソン大会ボランティア	和歌山市	11月
24	和歌山県人権施策推進課	ふれあい人権フェスタ	和歌山市	11月
25	MEIKOU WANDER STREET 実行委員会（株式会社ワカヤマヤモリ舎内）	移住イベントWAKAURA MEIKOU WANDER STREET	和歌山市	11月
26	一般社団法人市駅グリーングリーンプロジェクト	子どもまちあそび事業（紀州忍者参上！集まれ！紀の国っ子忍者たち！）	和歌山市	12月
27	和歌山市子ども支援センター	ふれあい教室	和歌山市	12月
28	和歌山県教育長生涯学習局スポーツ課	第22回和歌山県市町村対抗ジュニア駅伝競走大会ボランティア	和歌山市	2月

④学生の感想（授業評価アンケートより抜粋）

・「ボランティアへの考えがとても変わる授業でした。2 年生でもボランティアに参加して、ボランティアを通してたくさんの方々と助け合っていきたい」

・「今までボランティアに参加した経験が少なかった為、初めは面倒臭いの一点張りだったのですが、この授業を受講したことにより、人のため、自分のためになるボランティアの素晴らしさを認識することができました」

（文責：江口怜、森﨑陽子）

アルテリーヴォ和歌山
サッカーの試合運営ボランティア

（2）１年生選択科目「地域連携フィールド学習」

１．概要

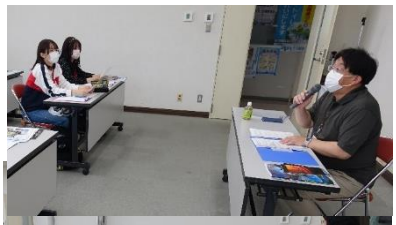
本科目は、地域の文化や特性を理解し、また地域の魅力を再発見するとともに、少子高齢化等に伴う地域の課題を解決する熱意を育むこと、また多様な世代と良好な関係を築くコミュニケーション力を育成することを狙いとしている。本年度は 13 名の学生が受講し、感染対策に配慮し、宿泊を避けつつ 3 日間の現地フィールド学習を行うことができた。コーディネートいただいた日高川町企画政策課定住促進室や日高川町教育委員会、紀州体験交流ゆめ倶楽部を始めとする関係の皆様には厚くお礼申し上げたい。

２．授業の流れ・フィールド学習の概要

フィールド学習①　5 月 21 日（土）

＜行程表＞

8:45～　JR 和歌山駅集合・バス出発、日高川町役場到着
10:00　岡本安生様（日高川町企画政策課長）ご講義
11:00　原見知子様（紀州体験交流ゆめ倶楽部・副理事長）ご講義
13:00～14:30　日高川町防災センター到着、館内見学・体験など
15:10～16:30　日高川町製炭研修所にて体験
講師：湯上彰浩様（「B-STYLE」代表）
16:40　SanPin 中津（道の駅）訪問、休憩・見学後バスで帰宅



＜学習内容＞

・紀州体験交流ゆめ倶楽部副理事長の原見さんから、ご自身のご経験をふまえてゆめ倶楽部の取り組みの経緯や意義、子どもにとっての体験学習の重要性等をお話いただきました。
・岡本課長からは、教員を目指されていたご経験もふまえながら、日高川町の概要、魅力、課題、定住促進のために実施している施策等についてお話頂きました。
・日高川町防災センターでは、日高川町の災害の歴史や防災対策についてご講義をいただいた上で、館内を見学させていただき、また消火器体験ゲームや水害時の水圧体験、避難所で利用する段ボールでの間仕切り製作体験などを通して、防災について学習を深めました。
・和歌山県は日本有数の紀州備長炭の生産量を誇り、中でも日高川町は生産量が日本一です。今回は、日高川町企画政策課のご紹介で、若手の炭焼き職人として活躍されている湯上さんよりお話を伺い、紀州備長炭を用いたコーヒーの焙煎体験をさせていただきました。

フィールド学習②　6 月 12 日（日）

＜行程表＞

13:30～15:00　道成寺到着、絵巻物体験、見学など
15:00～15:40　JR、紀州鉄道で移動
15:40～17:00　西御坊駅到着、ガイドのご案内で寺内町散策

＜学習内容＞

・道成寺は、701 年に創設された和歌山県最古の寺で、歌舞伎の題材として多く取り入れられている「安珍清姫伝説」で有名です。一昨年度に続き、今回もご住職様の絵解き説法を伺い、一同軽妙な語り口に魅了されました。お寺周辺では、銘菓釣鐘饅頭も美味しく頂きました。

・午後は、紀州体験交流ゆめ倶楽部のコーディネートにより、現地ガイドの津本京子さんに御坊市寺内町を案内していただきました。寺内町は、本願寺日高別院を中心に形成され、江戸時代に各地の特産物を扱う問屋などが軒を並べ、大変栄えていました。現在はかつての街並みを活かした観光産業が盛んです。

・約 2.7km をのんびり走る紀州鉄道の西御坊駅からスタートし、産業革命のさきがけとなった日の出紡績のレンガ塀をはじめ、古い町並みを巡り、地元の歴史を教えて頂きました。西御坊駅付近で保護猫活動をされている団体があり、実際に保護猫の様子を見せて頂くという偶然の出会いもありました。

フィールド学習②　９月８日（木）

＜行程表＞

8:00　JR 和歌山駅集合、バス出発

9:10～10:40　日高川町立笠松小学校にて学校見学、休憩時間に子どもと交流

10:45～11:00　絵本屋イハラ・ハートショップ見学、道のほっとステーションみやまの里にて休憩

11:05～12:00　ヤッホーポイント到着、散策・体験

12:20～15:30　長瀬さん宅「木工房」で昼食休憩後、「押し花マグネット」「小物入れ木工工作」体験

＜学習内容＞

・以下は、学生が学んだ内容をまとめたレポートです。

①<u>笠松小学校訪問</u>

【特徴】

・複式のクラスで合計４クラス

・算数の授業では、電子機器でタイマーを測る等、時代を先ゆく！

・先生は９人、みんなを見つつ１人１人最後まで寄り添う

・人数が少ないのでみんなが家族みたいに仲がいい

信愛生も混じってみんなでドッチボール

②美山地区ヤッホーポイント

ドキドキしながら
渡ったよ！！

ヤッホーポイントに
行くまでには
「日高川
レインボーブリッジ」
が！！

先生もヤッホーーーー

山や谷に向かって叫ぶと山彦として帰ってくる！

「ポーズしながらでもヤッホーー」
「お友達ともヤッホーー」

みんなでワイワイ楽しいね♪

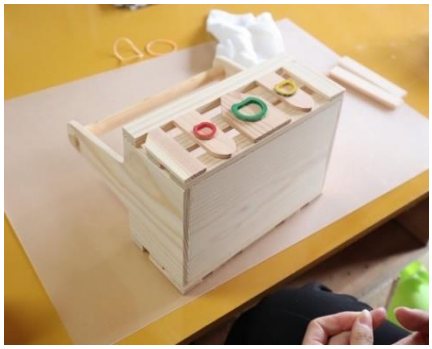
③ものづくり体験（「紀州体験交流ゆめ倶楽部」さんのコーディネート）
～「押し花マグネット」作り～

小さいお花🌸やはっぱ🍃の押し花を、
正方形のヒノキにに並べて作ったよ✨

自分の好きなお花を並べられて、
違った個性が出てて面白かったね！！

～小物入れ木工工作～

長瀬さんに教えていただきながら、
自分だけの小物入れを作ったよ



ハートをつけて、
可愛くなったね

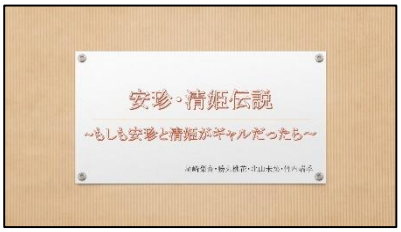
今回の活動でも。沢山の人と出会い沢山の刺激をもらいました！
自然の偉大さを感じ、地方の小学校の現状も学びました。
これからも色々な課題について考え、自分には何ができるのか模索したい！

３．事前学習・事後学習

・毎回のフィールド学習の前後に、訪問する場所や人に関する事前学習と、実際に訪問して学んだことを振り返る事後学習を行いました。

・また、4 つのグループに分かれて自分たちで調べたいテーマを決め、「和歌山の特産物」「日高川町について」「御坊寺内町を歩く～紀州御坊語り部の旅」「安珍・清姫伝説～もしも安珍と清姫がギャルだったら～」と題して成果発表を行いました。

・10 月のオープンキャンパスや 12 月の学園祭では、本科目で学んだことを模造紙にまとめて展示発表を行い、数多くの高校生や保護者、地域の方々に学びの成果を発信することができました。



４．学生たちの学んだこと～レポートより抜粋～

・「日高川町は過去に２度水害に襲われていた。また、近いうちに起こる南海トラフ地震のためにたくさんの対策が行われていた。日高川町防災センターでは 6000 人が 1～２日過ごすことのできるだけの食糧や毛布などが備蓄されていた。他にも、防災行政無線を一家に一台置き、雨音や風音で外の音が聞こえなくなっても確実に情報が伝わるように工夫されていた。同じように河川監視カメラも洪水・大雨警報が出た際に自宅で見ることができるようにされている。過去と同じ過ちを繰り返さないという強い意識で安心して暮らせる町になっている。」

・「全 3 回のフィールド学習で特に日高川町についてたくさんの面から学ぶことができた。たくさんの方からお話が聞け、実際に体験や見学ができて新しい発見が何度もあった。過疎化による人口減少などの課題解決に向けて政策を進めていた。日高川町だけでなく他の地域にも知られていないことがたくさんあるのではないかと感じた。」

・「日高川町製炭研究所にて紀州備長炭による焙煎体験をさせていただいた。紀州備長炭は紀伊半島の沿岸部の山林に自生するウバメガシを原料に作られる固く良質な白炭である。和歌山県は日本有数の生産量を誇り、中でも日高川町は生産量が日本一となっている。紀州備長炭の製炭技術は、和歌山県の無形民俗文化財に指定され、紀州備長炭技術保存会により技術の継承が努められている。しかし、技術を受け継いでいく若い人が少なくなっている。焙煎体験や SNS を使った工夫を通して、若い人に紀州備長炭の良さや、素晴らしい技術を知ってもらい、次の世代に伝えていく必要があると感じた。」

・「私は現地に行くまでは日高川町のことはあまり知らなかった。だか、実際日高川町に行って、現地の人に話を聞いたり、コーヒー焙煎体験や、押し花マグネット、ヤッホーポイントなど日高川町の魅力を直接感じることで、日高川町はすごくいい場所で人も温かく、住みやすい地域なんだと知ることができた。日高川町の魅力を伝えるのは、現地の人や私たちのように実際直接体験した人が伝えるべきである。日高川町をいかにアピールできるのか。SNS などを活用し、日高川町の魅力を伝えていくことが私たちに出来ることであると考える。」

・「私は高校生のとき、日高川町に住んでいた。3 年間も住んでいたから日高川町のことに関して少し知った気になっていたが、今回改めてフィールド学習として行ってみると知らないことだらけだった。フィールド学習に行って一番記憶に残っているのは道成寺へ行ったことだ。道成寺へ行ったとき釣鐘まんじゅうを買い、冷たいアイスクリームも食べ、おみくじも引いた。こんな楽しいこと美味しいものがある中、道成寺へ行き 1 番記憶に残っているのは安珍と清姫の物語や建物の中にある仏像や内装である。（略）和歌山市内に比べ人が少なかったりお店が少なかったりする日高川町だが、地域の人に愛され、もっと日高川町を良くしていこうという想いを強く感じることが出来た地域のフィールド学習になった。日高川町でしか体験できないこと、食べれないものが沢山あった。地域愛で溢れている町だなと感じた。日高川町へ行く機会が多いのでまだまだこれからもっと日高川町の良いところを見つけたいと思う。」

５．まとめ

コロナ禍ではあったが、学生たちは現地を訪問することで初めて感じられる魅力を堪能し、地域の課題解決に向けた意欲を育むことができた。今年度は日高川町と本学の連携をさらに深めるために協定を結ばせて頂いた。今後も、地域の活性化と学生の学びを両立させる連携のあり方を模索したい。

（文責：江口怜、千森督子）

（3）2 年生必修科目「地域力再生論」

①授業概要・構成

2 年生前期に開講される地域連携科目の一つであり、2022 年度の受講人数は 69 名だった。

和歌山が抱える地域課題について理解を深め、課題解決のための力を身につけることを目指し、地域課題の具体的な事例を行政関係者・地域住民・NPO 関係者等との対話やグループごとのインタビュー調査を通して協働的・実践的に学習する方法をとっている。実際の授業の流れは下表の通りである。

表　2022 年度「地域力再生論」の授業構成

回数	日程	タイトル	ゲスト講師	概要
1	4月14日	オリエンテーション		
2	4月21日	和歌山の地域課題を学ぶ		
3	4月28日	地域課題の解決方法を考える①		6グループに分かれ、各地域課題に関して事前学習を行い、インタビュー内容を考案。
4	5月12日	地域課題の解決方法を考える②		
5	5月19日	ゲスト講師との対話①「未来ある子どもたちにリサイクルの大切さを知ってもらう！」	松田美代子氏（株式会社松田商店会長）	60分程度の講義＋30分程度の公開インタビュー。
6	5月26日	ゲスト講師との対話②　「SDGsと和歌山市における取組」	滝本智史氏（和歌山市企画政策課事務主査）	
7	6月2日	ゲスト講師との対話③　「地域資源（フルーツ）を活かした地域活性化の取り組み」	児玉敏昭氏、西峰祐美氏（一般社団法人紀の川フルーツツーリズム理事）	
8	6月9日	ゲスト講師との対話④　「地域力再生における市民の役割＆わかやまNPOセンターの取り組みについて」	志場久起氏（和歌山県NPOサポートセンター・センター長）	
9	6月16日	ゲスト講師との対話⑤「和歌山県の現状と取り組むべき課題」	新田寛樹氏（和歌山県企画総務課班長）	
10	6月23日	ゲスト講師との対話 ⑥「多文化共生のまちづくり」	木村恵子氏（和歌山県国際交流協会国際交流推進員）	
11	6月30日	グループ別の振り返り・成果発表準備①		プレゼンテーション準備
12	7月7日	グループ別の振り返り・成果発表準備②		
13	7月14日	成果発表会		プレゼン発表
14	7月21日	まとめ		

②学習成果

ゲスト講師の皆様には昨年に続き、わかりやすく、それぞれの立場から取り組まれている地域の課題や現状等についてお話頂けた。学生たちは、事前にグループに分かれて各機関・団体の取り組みを学び、実際にゲスト講義の後にインタビューを行うことで、実践的・協働的な学びを経験することができた。ご協力いただいた皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

③受講学生の感想

・「和歌山の課題や現状を知ることのできる、非常に有意義な講義だと感じました。私たちが今できることから取り組んでいきたいと思います」

・「地域を愛し、今後は地域住民としての自覚をもって和歌山県に少しでも貢献していきたいと思った」

・「話し合う経験を多くもてたので、自主性がつき、また客観的に相手のことを見ることもでき良い経験となった。地域についてまだまだ知らないことが多いと感じた」

・「事前学習、講義、発表の流れで進むところが良い。能動的に学ぶことができ、確実に知識を身につけることができた」

（文責：江口怜、千森督子）

（4）2 年生必修科目「地域連携フィールドゼミナール」

①概要（シラバスより転載）

フィールド学習により地域特性への理解を深めながら、内在する地域課題を解決する意欲と課題解決力の向上を図る科目である。担当教員のもと、10〜15 人程度の少人数グループに分かれて、ゼミ形式で学習を深める。和歌山市の中心市街地でありながら空洞化に悩む「ぶらくり丁」界隈や、歴史を生かしたまちづくりを積極的に行っている「湯浅町」等をフィールドに、和歌山市や湯浅町と連携して、地域の特性や町の仕組み、抱える課題を調査・探求し、町の整備、活性化や歴史的風致維持向上にむけた計画、提案を考える。

②ゼミ担当教員・テーマ・自治体

千森督子ゼミ「湯浅の地域活性化を目指した町づくり」＠湯浅町
森﨑陽子ゼミ「和歌山市民の健康・体力づくりについて」＠和歌山市
森下順子ゼミ「和歌山市と串本町の子育ち・子育て支援の課題と実践」＠和歌山市・串本町
小田真弓ゼミ「幼児教育における地域連携について」＠大阪府南部
江口怜ゼミ「本町・ぶらくり商店街の活性化に向けて」＠和歌山市

③新型コロナウイルス感染症対策

2022 年度は、前年度に引き続き、コロナ禍の影響を大きく受ける中でゼミ活動を進めた。昨年同様、以下のように新型コロナウイルス対策に万全を期した。

＜新型コロナウイルス感染症対策（ゼミ共通）＞

・フィールドでの活動形態を精査し、不特定多数の人と濃厚接触する可能性のある活動は行わない。
・公共交通機関による移動やフィールドでの活動の際に、三密を避け、感染リスクを徹底して避ける。また、感染リスクの高い飲食をできるだけ避けたスケジュールで行う。
・独自に「感染防止チェックシート」を作成し、学内教職員で活動形態等に問題がないか精査する。
・学生への健康観察を義務付け、当日の発熱や体調不良者はフィールド活動への参加をとりやめ、代替措置によって対応する。
・フィールド活動の概要やゼミ共通の新型コロナウイルス感染症対策を保護者にも丁寧に説明し、参加への同意を得る。

④成果報告

以下に、各ゼミ又は各ゼミの学生が作成した 1 年間の成果報告書を掲載する。大学開学から 4 年目、本科目の開講から 3 年目を迎えて、少しずつ実践や研究が深まっている様子を読み取っていただければ幸いである。

地域連携フィールドゼミナール （千森ゼミ） 成果報告

湯浅の地域活性化を目指した町づくり

指導教員：千森督子

ゼミ生：里脇真帆、芝峰早紀、田中花歩、田村百和、寺杣知見、中井陽加里、西園海紘、橋爪保乃華
林田瑠香、福萌香、藤井那帆、古田千智、森下木葉、渡邊彩羽

1. はじめに

本ゼミは、フィールド学習により、地域特性への理解を深めながら内在する地域課題を解決する意欲と課題解決力向上を図る科目である。私たちは、伝統・文化を大切にし、歴史を活かした町づくりを行っている「和歌山県有田郡湯浅町」をフィールドに、町と連携して地域の特性や仕組み、抱える課題を調査・探究し、町の整備と活性化を目指した活動を行った。

2. 本年度の活動

（1）事前学習

目的：活動場所である湯浅町について詳しく知るために、事前学習により歴史・産業・現代的特色・教育・歴史的な建造物について学習する。
期間：令和４年４月～7 月
方法：文献検索（WEB 検索を含む）、湯浅町役場職員による講話や提供資料、現地調査
現地調査場所：湯浅えき蔵、湯浅小学校講堂、重要伝統的建造物群保存地区内建物
（旧栖原家、岡正、千山庵、北町ふれあいギャラリー、角長職人醤油蔵、甚風呂、０家住宅）

（2）活動

1）子どもの社会教育イベント

目的：社会教育活動でも「わくわくチャレンジ教室」に参加し、イベントを開催し、学校教育では得られない体験を子ども達に提供する。また、異なる学校の児童が交流する機会が得られるとともに、湯浅の特色に触れられる内容とする。

※「わくわくチャレンジ教室」とは
教育委員会と連携しながら社会教育に取り組む活動。主に夏休みを中心に開催している。

タイトルと実施年月日：

① 絞り染めを使ったうちわ作り　　令和４年８月３日

② プラ板でキーホルダーを作ろう！　令和４年８月３日

2）古民家再生

目的：歴史を生かした湯浅町の町づくりについて理解し、町家再生活動を実体験することにより、町づくりに寄与する。

内容と実施年月日：内壁張り作業　　令和４年 10 月 26 日、11 月９日

3．本年度の活動概要

以下、実施した、（２）活動について報告する。

１）子どもの社会教育イベント

わくわくチャレンジ教室でのイベント詳細

場所：湯浅えき蔵　会議室

対象：小学生

１～３年(①絞染めを使ったうちわ作り)

４～６年(②プラ板でキーホルダーを作ろう！)

人数：各８人

会場染色場所

① 絞染めを使ったうちわ作り

【事前準備】

a. 絞り染めうちわの試作

・用紙…天ぷら紙

（色のつきやすさ、破れにくさ、折りやすさ）

・絵具…水彩絵の具、ラメ入り絵具

（色のつきやすさ、水の溶けやすさ）

・染め方…輪ゴムで絞り染色

（色の混ざりにくさ）

染色の様子

b. 活動の手順の計画

1 司会者の挨拶

2 絞り染めで作るうちわのつくり方説明

3 乾かす間、湯浅に関するクイズを実施

4 乾いた和紙をうちわの骨組みに貼る

5 完成品を前で発表

6 終わりの挨拶

【活動内容】

1 サンプルを見て、うちわのイメージを考案する。

2 和紙を折る。

3 折った和紙を輪ゴムでとめる。

4 好きな色の水彩絵の具で和紙を染める。

5 染めた和紙を広げて乾かす。

6 和紙が乾いたら、うちわの骨組みに貼り付ける。

7 骨組みから出た部分をハサミで切る。

乾かす工程

うちわ完成

乾燥した紙

② プラ板でキーホルダーを作ろう！

【事前準備】

a. プラ板でキーホルダーの試作

b. 資料作り

・ポスター作り

・作り方の説明書の作成

1 白紙に描きたい絵を描く（下書き）。

2 10×10cm のプラ板を下書きの上に置き、動かないよう固定する。

3 マッキーでなぞり、色を付ける。

4 学生が絵の周りを切り、キーホルダーの紐を通せるよう、穴あけパンチで穴をあける。

5 プラ板をのせたアルミホイルをトースターの内棚の上に置いて加熱し、プラ板が反り返ったらトースターから出す。

6 冷ますために分厚い本の間に挟み、上から押し付ける。

7 キーホルダーの紐を通して完成。

【活動内容】

1 司会者の挨拶

2 レクリエーション(自己紹介・クイズ)

3 プラ板づくりの説明

4 湯浅をモチーフにしたキャラクターのキーホルダーづくり

5 好きなキャラクターのキーホルダーづくり

6 終わりの挨拶

キャラクターの製作

プラパンキーホルダーを作ろう！

1. イラストをかく

まずは紙に、作りたい大きさの4倍くらいのサイズのイラストをかきます。(熱で4分の1にちぢむため)
次に、下絵の上にプラパンを重ね、サインペンでなぞります。プラパンが動かないように、テープなどで固定しましょう。下絵をなぞったらプラパンをうら返し、油性ペンやポスカで色をぬったり、もようをかきます。

3. トースターで焼く

くしゃくしゃにしたアルミホイルをしいたオーブントースターでプラパンを焼きます。焼き時間の目安は、800Wで90秒前後。800Wなら60秒前後です。焼き終わったらオーブントースターから取り出し、本などにはさんで冷まします。(先生たちがします！)

2. カット&あなあけ

全体に色がぬれたら、あなあけパンチで、キーホルダーパーツを取り付けるためのあなを開けます。(先生たちがします！)
その後、かいた絵から3mmほど外側をイメージして、ハサミやカッターでカットします。このとき、あなのまわりも3mmほどあけておいてください。

4. チェーンを通す

パンチで開けておいたあなに、お好みのチェーンを通したらできあがり！（先生たちがします！）世界に一つだけのキーホルダーを作りましょう！

作り方の説明書

ポスター

完成したキーホルダー

２）古民家再生

信愛大学は、２年前から０家の再生を早稲田大工さんと共に取り組んでいる。外壁の改修と土間づくり、庭の整備を終えていたため、今年は内部の壁づくりを行なった。

【内壁張りの内容と作業工程】

1 作業理解…早稲田大工さんに工具の使い方や板の表裏の確認方法､注意事項を教えていただく。

2 内壁に張る板の順番を決め、板の裏に番号を振る。

3 壁の幅に合わせて板の長さを測って線をひき、線に沿って鋸で切断する。

4 切断した板を壁に打ち付けるために、板に電動ドリルで少し穴をあける。
（穴をあけることによって、釘が入りやすくなり安定する）

5 壁に板を合わせ、あいた穴の部分に釘を差し込み、金槌で打ち込む。

【工夫点】

工夫した点は赤色が濃い板を下に、上にいくにつれ白に近い色の板を配置した。これは、板になる前の木がこのようなグラデーションになっており、自然に馴染み、安定した圧迫感のない空間を作るためである。

４.まとめ

前半は､「わくわくチャレンジ教室」に参加し、うちわ作りやキーホルダー作りを行うことで、児童と個別に関わることができ、湯浅の地域に関連した教育にも取り組むことができた。

後半は、歴史ある町を維持・継承するための古民家再生活動に取り組んだ。今年度は、内壁張り作業を体験させていただき、皆で相談・協力して作業に取り組み完成する事ができた。

５.文献

- 湯浅町教育委員会『紀州湯浅の町並み』、2001 年
- 湯浅町役場公式ホームページ(town.yuasa.wakayama.jp)
- 湯浅町教育委員会（yuasa.ed.jp）　他

地域連携フィールドゼミナール （森﨑ゼミ） 成果報告

和歌山市民の健康体力づくりについて

指導教員：森﨑陽子
ゼ ミ 生：泉谷愛祐花、岡本侑樹、木村栄光、楠山拓夢、小谷歩沙、阪部葉那、笹田悠生、島本笑羽、瀬田遼、田中佑介、辻丸優斗、徳重拓人、西隆弥、野田幸、豆塚空、三上悟聖

１．はじめに

私達はまず、研究内容を子ども・大人・高齢者の健康問題に決め、そこから「運動不足の原因」、「運動の意義」「運動処方」、「世界・日本各地の健康に関する取り組み」等を調べ、KJ 法で模造紙にまとめた。

次に、まとめた内容をゼミのメンバーで共有し、それらを参考に各世代の健康問題への解決策を考え、和歌山市スポーツ振興課に提案をした。その際に、和歌山市の調査資料から平成 27 年度の成人（18～80 歳代）の週 1 回以上の運動習慣率が平均 48.8%と低く、令和 7 年度までに 70%にすることを目指して取り組み、現在では 62.1%まで上がってきていることが分かった。しかし、世代ごとにみると 30 歳～39 歳は 46.3%、40 歳～49 歳は 48.8%と未だ低迷しており、和歌山市の見解では、「仕事や子育てで忙しくスポーツに取り組む時間が取れない為」と考えられ課題となっている。自分のライフスタイルにあった運動習慣づくりに繋がるよう、親子でスポーツを楽しむ運動習慣づくりや、通勤時間や休憩時間等を活用した生活の中での運動習慣づくりを促す必要がある。

また、和歌山市スポーツ推進計画中間報告（2017 年）から運動への取り組みに対する児童の 2 極化が顕著に現れていると報告されている。児童が積極的にスポーツに取り組む態度を育成する為に、学校体育授業の充実を図ることや、地域スポーツを通じて十分に体を動かす体験をさせていくことで、スポーツの楽しさや意義・価値を実感できるような環境整備を図っていく必要がある。更に、幼児期の遊びにも目を向け、保・幼・小の連続性を理解し子どもの発達段階に合った遊び・運動を考えていく必要がある。

以上のことから、私達森崎ゼミは、「**和歌山市民の運動不足を解消する為に、健康・体力づくりに意識的に取り組む必要がある。その為私達は運動を好きになるきっかけとなる其々の年代に応じた運動を提案すること**」を目的にした。

２．企画・活動内容

2.1 幼児チームの企画・活動

【目的】近年、各世代の運動時間が減少しており、その問題を解消する一つの策として、幼児期から運動
習慣を身につけておくことが望まれる。生涯に渡り運動を継続できるようにそのきっかけ作りをする。

【企画①】リトミック運動の作成

リトミック運動の作成と指導の練習、こひつじこども園訪問を計画したがコロナ感染拡大の為中止。

【企画②】運動会（音に合わせて、体を動かし、表現を楽しむ等。）

幼児向けの楽しく体を動かすことができる運動を考えた。

2.2 小学生チームの企画・活動

【目的】①近年の、小学生の運動習慣の減少を防ぐ為。
②運動苦手意識を解消し、体力の 2 極化を緩和する為。

【企画①】運動を勧めるチラシ作り

小学生に必要な運動と効果を５つに分け､保護者に理解してもらう為のチラシを作成｡学園祭で配布。
【企画②】運動スタンプラリー
スタンプラリー形式。会場（学校等）内に設置されている課題（運動問題）を親子で協力してクリアを目指す。時間内にクリアできた課題の数を競い合う。

2.3 大人チームの企画・活動
【目的】以下 2 点の問題点の改善を図る。
①市政世論調査より、30～40 歳代の週 1 回以上の運動・スポーツの実践率が低迷している。
②30～40 歳代を対象にした運動のイベントが少ない。
【企画】運動チラシの作成（家庭用：毎日のちょっと運動　仕事用：すきま運動）
30～40 歳代の働き世代を対象に、コロナ禍、在宅でもできる運動を作成する。特色は、多忙によって運動の時間を取ることができなくても、通勤、勤務中や家事などの合間に運動ができることである。具体例として、洗濯物を干す際身体の伸びを意識したり、椅子に座っている際の姿勢を改善したりすることが挙げられる。

2.4 高齢者チームの企画・活動
【目的】今回は高齢者（特に車椅子使用者）を対象とする。運動に興味を持ち、楽しさを味わいながら動くことで残存機能を高める目的を叶えたいと考え、主に上半身の運動について学び指導法を研究する。
【企画】椅子を使った体操（高齢者プログラム…有酸素運動＋筋力トレーニング＋バランス運動）
「人間っていいな」の曲に合わせ、運動(エクササイズ)を作成した。車椅子を使う方でもできるよう手のグーパー運動や肩回し等上半身を中心とした運動を考えた。また、完成した運動を実際に自分達で行い映像に残した。それを持って実際に福祉施設（社会福祉法人寿敬会大日倶楽部オラ）を訪れ、利用者の方々と交流する時間を設けることにしたが、コロナ感染拡大の為に訪問することはできなかった。

2.5 子ども、大人の合同企画
【目的】和歌山市民の健康に関するいくつかの課題の中から、低迷する 30 歳～40 歳代の運動習慣率を改善することと、児童の体力の 2 極化を解消することに焦点を当て「親子運動会」を立案した。親子で行う理由として、その年代の多くの大人は仕事、家事、育児等の多忙により運動をする時間が取ることができておらず、大人だけを集めて運動企画を実施することが難しい。そこで、30～40 歳代の大人と子どもの運動習慣の減少という２つの課題に目を向け、親子一緒に運動することでこれらの課題解決を図ろうと考えた。
【企画①】Let′ enjoy sporting with familiar things　～身近なものでスポーツを楽しもう！～
親子で一緒に運動することの楽しさを知ってもらい、家族の運動習慣づくりのきっかけをつくること
を目指す。家庭にある身近な物を活用しできる運動遊びを紹介し、動くことが好きな子から上手に動くことができる子になってもらいたいという願いから親子運動会を開催した。
対象：4.5 歳児とその保護者　16 組（全ての保護者が 30～40 歳代であった。）
内容：家庭にある敷物、ゴム紐、籠、新聞紙、布団たたき等を活用した以下の 4 つの運動。
〇ツイスター：バランス力、柔軟性を養う。手足を置く位置を区別しやすいよう 2 色に分ける共に、海というテーマに設定しタコ等のイラストをマークにすることで子ども達の興味を引きつけるようにした。
〇ゴム跳び：俊敏性・柔軟性を養う。跳び箱や支柱を使いゴムを様々な高さに張り巡らせ、子ども達

がゴムを跳んだりくぐったりして俊敏性や柔軟性を養えるように工夫した。
〇玉入れ：腕力、調整力を養う。ボールは幼児が掴みやすいように、小さすぎず、大きすぎないサイズで。
〇洗濯叩きボール運びレース：バランス力、協調性を養う。親子で一緒に、ボールを運ぶ。子どもの方が大人よりボールを運びやすいよう、道具の工夫をした。

ツイスター

ゴム跳び

玉入れ

ボール運び

【アンケート結果】
・運動を心掛けているか（大人）：いる 7 名、いない 7 名
・心掛けられない理由：仕事や家事が忙しく時間がない 7 名
・楽しかった運動は：右図 1 を参照
・また参加したいか：参加したい 14 名、参加しない 0 名
・感想：「運動不足解消になった。」「コロナ禍のため、家でも試してみたい。」「ありきたりな種目でなくどれも楽しかった。」「大人も子どもも面白かったです。」

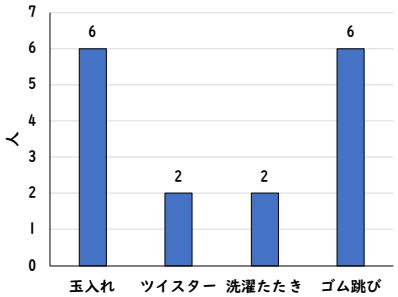


図１　楽しかった運動

【企画②】親子で体を動かして様々な力を試そう　～大運動会～
　小学校低学年では、運動を通して「投げる力」「素早く動く力」「跳ぶ力」「続ける力」等の運動基礎力を身に付けるとともに、「協力する」や「最後までやり遂げる」心も育てられることが考えられる。家族で様々な力を試し、家族の運動習慣づくりのきっかけになることを目指し、運動会を開催する。
対象：1.2 年生と保護者　15 組（全ての保護者が 30～40 歳代であった。）
内容：以下の 4 つの運動。
〇的当て：腕力、調整力を養う。大人と子どもとで異なる適切な距離を設定した。
〇大縄跳び：協調性、跳躍力、持久力を養う。チーム対抗。子どもと大人で分かれて行った。当日は子どもにとって大縄跳びの難易度が高いと判断し、跳び方を大なみ小なみに変更した。
〇椅子取りゲーム：瞬発力を養う。走り出す合図に幾つかの楽器を用い、決められたの楽器が鳴ると走り出すように設定することで聞く力・集中力を養うように工夫した。
〇ジグザグリレー：俊敏性を養う。跳ぶ、横移動等、様々な運動ができるよう、コースづくりを工夫した。

的当て

大縄跳び

椅子取り

ジグザグリレ

【アンケート結果】
〇運動を心掛けているか（大人）：いる３名、いない６名
〇心掛けられない理由：仕事や家事が忙しく時間がない。6 名
〇楽しかった運動は：右図２を参照
〇また参加したいか：参加したい９名、参加しない０名
〇感想：「体を動かす機会が減っている中、いつもとは違った環境とお友達に触れあいながらの運動する時間はとても楽しく
交流できました。」「小学生になると親子で一緒にすることがなくなるので、こういう機会があると親子の触れ合いにもなり、とてもいいと思います。」

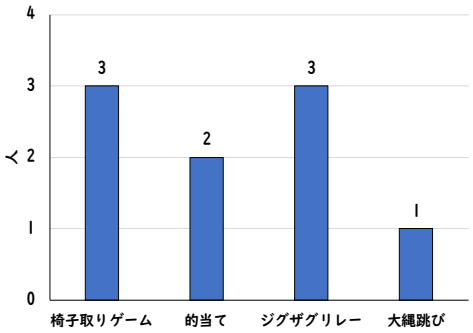


図２　楽しかった運動

３．まとめ

実践できた「親子運動会」では、参加して下さった多くの方々の感想に「楽しかった」「家でも出来そう」「親子の触れ合いができた」とあり、微力ではあるが活動の目的を概ね達成できたと考える。

しかし、今回は予備研究調査を行ったうえで運動内容を立案したはずであったが、実際に行うと多くの課題が見つけられた。運動に興味関心を持って（好きになって）もらう為には、対象となる人の「身体の発育段階に応じた運動内容・方法」「機能の発達段階に応じた運動内容・方法」「興味や関心を引く運動内容・方法」「適切な運動量」等を十分に考慮した上で立案しなければならないことを痛感した。私達は、幼児教育・初等教育の勉強を行っていることから、生涯スポーツを充実させるために重要な役割を担っていることも自覚しなければいけない。今回の反省点を生かし、一人でも多くの方々に運動の楽しさや意義を伝えられるようになりたい。今後も、「学内行事で来客に説明」「チラシを作って配布」「イベントを継続」等で「和歌山市民の健康体力づくり」「運動の必要性」を発信していきたい。

謝辞

和歌山市スポーツ振興課の方々を始め、運動会に参加して下さった方々、コロナ感染拡大の為に実施できませんでしたが、こひつじこども園、 社会福祉法人寿敬会大日倶楽部オラの方々に、今回の私たちの企画にご指導ご協力頂きましたこと深く感謝申し上げます。

参考・引用文献

・阿部孝・琉子友男　「これからの健康とスポーツの科学」　第４版　講談社　2018
・鵜木秀夫・柴田真志・高見和至・寺田恭子・富樫健二　「はじめて学ぶ健康・スポーツ科学シリーズ 11　健康づくりのための運動の科学」（株）化学同人　2018
・板野平監修　神原雅之・野上俊之編著「ダルクローズ教育法によるリトミックコーナー」株式会社チャイルド本社 2001
・編集中野昭一　「運動生理・生化学・栄養　図説・運動の仕組みと応用　第２版」　医歯薬出版株式会社　2000
・文部科学省　「幼児期運動指針ガイドブック」　2012
・幼児期運動指針（文部科学省）https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm
・和歌山市和歌山市教育委員会　「和歌山市スポーツ推進計画」　2013
・和歌山市和歌山市教育委員会　「和歌山市スポーツ推進計画（中間評価）」　2017

地域連携フィールドゼミナール（森下ゼミ）成果報告

和歌山市・串本町の子育ち・子育て支援の課題と実践

指導教員：森下順子
ゼミ生：畔上鈴奈、伊東柚香、岡裏朱芳、鎌田雄成、神谷朋果、北村彩、北村紗亜也、志良堂陽、谷菜摘、室綾香、森川優花、山野莉奈、米坂梨乃（13 名）

【はじめに】森下ゼミでは昨年度より和歌山市及び串本町で、子育ち・子育て支援を中心とした地域交流を行っている。昨年度の森下ゼミでは、串本町の公園に焦点をあてて調査を行ってきた。そこで課題となったのは、砂場のある公園が少ないということであった。大学の授業で度々砂場遊びの大切さを学んでいる私たちは、子どもたちに経験させてあげたい砂場遊びをテーマに和歌山市と串本町の二つのグループに分かれてフィールドワークを行った。

【活動内容１】和歌山市（伊東、鎌田、北村、室、森川、山野、米坂　７名）

・大学から１km未満の公園調査　　・和歌山市役所公園緑地課へ公園に関するヒアリング調査の実施
・本町公園の砂場整備　　・アンケートをもとにした子育てイベントの実施

【活動内容２】串本町（畔上、岡裏、神谷、北村、志良堂、谷　６名）

・串本町で子育てをする保護者へのアンケート　・磯の浦への砂浜調査
・子育てイベント「すなはま親子広場」（串本町）　・他大学との交流

【調査結果及び考察１】和歌山市フィールドワーク

公園調査について

実際に大学から１km未満の公園に行き、砂場の有無や遊具の種類、設備等について調べた結果が以下の通りである

京橋親水公園

本町公園

紀和駅前公園

城北ふれあい公園

本町公園、紀和駅前公園には遊具が多くあり、他二つの公園は遊具がほとんどなく、休憩できる場として作られていると感じた。唯一砂場があった本町公園も、砂が固まっており、遊べる状態ではなかった。

1. 公園緑地課へのヒアリング調査

（例）Q.遊具の安全性を考慮して、修理など行っていただくことは出来るのか。
A.遊具は年１回定期点検がされているが、優先順位があるため、すぐに対応することが難しいのが現状である。

2. 本町公園の整備

公園のごみ拾い、砂遊びが出来るよう、砂の掘り起こしを行った。

本町公園の砂場

子育てイベント「わくわくどきどきおにいさんおねえさんとあそぼう」

1. 目的

子育て支援拠点「ぐるんぱ」「わかば」にご協力いただいたアンケートをもとに、子育て支援イベントを企画した。

2. イベントの概要

日時：2022 年 8 月 26 日（金）
場所：和歌山信愛大学　保育実習室、本町公園
参加人数：乳幼児 10 名、保護者 8 名、計 18 名

★イベントの流れ

10：00	受付
10：30	自己紹介
11：00	イベント開始
11：30	着替え
12：00	終了

3. イベントの内容

①自由遊び

・保育実習室では、子どもが自由に遊べるように、ままごと、木製玩具、ブロック、絵本を準備した。

②小麦粉と水を使った感触遊び

・大学生と一緒に、小麦粉が変化していく感触や型抜きを楽しんだ。

③ガチャガチャのカプセルを使った宝探し

・掘り起こした本町公園の砂場で宝探しを楽しんだ。

4. 和歌山市フィールドワークの考察

イベントの初めはあまり興味を示していなかったり、どうしていいか分からず戸惑っている子どもがいたが、型抜きを渡したり、学生が作ったものを見せたりすることで、子どもたち自身が自分の遊びを見つけ、夢中になっている様子が見られた。これらのことから、子どもたちが楽しんで取り組みたいと思ってもらえるようにするには、楽しんでいる様子を見せることが必要であると感じた。

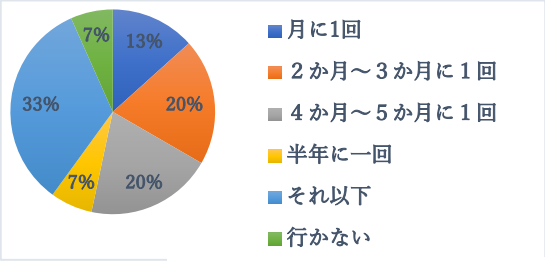
反省点としては、道具の準備や活動の流れといった事前準備の打ち合わせが足りていなかったことである。このことから、あらゆることを想定してイベントの企画運営をしなければならないと実感した。保護者の方との交流を通して、子育てを行う中での悩みや学生に求めていることについて聞くことができた。交流の中で公園の砂場の実態について話を聞いた。今日の砂場はタバコの吸い殻や動物の糞が捨てられており、遊べる環境ではないことを知った。この問題について私たち学生が出来ることは、子ども達が安心安全に遊ぶことができる環境を整える手助けだと考えた。

【調査結果及び考察２】串本町フィールドワーク

子育てイベント「すなはま親子広場」

１．目的

大学の授業で度々砂場遊びは、子どもに経験させたい遊びのひとつであると学んだ。自然豊かな串本町には、近くに砂浜があることから、砂場遊びを経験してもらうため、「すなはま親子広場」を開催することにした。串本町子育て支援拠点「りぼん」に通う保護者に事前アンケートを実施し、アンケート結果から海に行く機会が少ないことが分かったため、イベント内容を検討した。



図、海に行く頻度

２．保護者の方からの企画案

保護者の方に「子どもに体験してほしい砂遊び」について調査を行った。その結果「宝探し」が 4 名と最も多く、その次に「城づくり」2 名、その他にも作品づくり、砂の心地良さを感じることができる遊び、砂遊び・砂山作り、絵具を使った遊び等、様々な企画案が挙がった。

３．イベントの概要

日時：2022 年 10 月 23 日(日)10：00～11：00

場所：串本町橋杭岩海水浴場

対象年齢：小学校低学年以下の子どもと保護者

コロナ対策：事前予約制(人数制限)　(定員 15 組程度)

参加者はマスクの着用・検温・手指消毒の協力。イベント終了後に使用した場所・用具を消毒。

参加人数：乳幼児 28 名、小学生 27 名、計 35 名

イベントの様子

４．イベントの内容

① 宝探し(前半、後半)

前半と後半に分け、前半は 0 歳児～4 歳児が行い、後半は 5 歳児～小学校低学年が行った。

② 砂遊び

砂山づくり、砂絵体験を行った。

③ 自由遊び

砂浜の横にある芝生にブルーシートを敷いて、子どもが自由に遊ぶことができる場所とした。紙で作られた魚釣り、粘土、お絵描き、ボール、輪投げの準備を行った。

砂絵の様子

④ 愛知教育大学の学生による子育てに関する研究報告会

５．串本町フィールドワークの考察

私たちは、子育てイベント「すなはま親子広場」を通して、2 つのことを考えた。

1 つ目は、子どもの動きを想定し、イベントの企画、環境構成を考えなければいけないということである。イベントを行うにあたって、全体の見通しをもってルール説明を行うことや全体の遊びの配置や動線を考慮するなど、計画し準備をする必要があることを実感した。

2 つ目は、遊びの環境を整えることで、子どもたちの集中力が高まるということである。砂遊びをする子どもたちが集中して様々なことに取り組む姿から、興味をもつことのできる遊びの設定が大切であると考えた。

地域交流

１．串本古座高等学校との交流

①目的：串本古座高等学校の生徒と信愛大学の学生との交流を通して、串本町の子育て支援や子どもの遊び場についてお互いに調査した事を共有し、相互理解を深める。また串本町での親子広場開催の企画・運営を行う。

②実施方法：ZOOM と対面の併用

③活動内容：5 月 25 日～1 月 11 日まで計 6 回 ZOOM で実施

10 月 22 日～10 月 23 日は対面で実施

10 月 22 日　砂浜親子広場の前日打ち合わせ

10 月 23 日　午前:砂浜親子広場、

午後:高校生との振り返り

11 月 12 日　午前:くしもとこども園保育ボランティア、

午後:高校生との交流会

振り返りの様子

２．愛知教育大学との交流

①目的：子育て支援についての相互理解を深める。

②実施内容：ZOOM と対面の併用

③活動内容：7 月 13 日に ZOOM による交流会を実施

10 月 22 日～10 月 23 日は串本町にて対面交流

10 月 22 日　砂浜親子広場前日打ち合わせ

10 月 23 日　砂浜親子広場のスタッフ・保護者向け

報告会の開催

愛知教育大学との交流の様子

３．和歌山大学との交流

高等教育機関コンソーシアム（学生共同プロジェクト研究）による共同研究

４．地域と高校、他大学との交流の考察

串本古座高等学校や和歌山大学、愛知教育大学との交流を通して、串本町の子育て事情や子育てに関する悩みや砂遊びの大切さなど、互いに研究した事を共有すること、お互いの学習をより深めることができた。

【全体の考察】

砂遊びをテーマに和歌山市と串本町の二つのグループに分かれて、フィールドワークを行い、自分たちでイベントを企画・運営した。そのことから、子どもが育つ環境について実践を通して体験することで、地域の魅力に気づくことができると考えた。また、イベントを企画する際は事前の打ち合わせ、事前準備を念入りにしておくことの大切さや、あらゆる状況を想定することが大切だと学んだ。さらに、保護者の方との交流の中で子育ての悩みや地域の子育て事情について知ることができた。

これらの学びを通して、地域連携や繋がりを大切に、子育ち・子育て支援や教育・保育に携わっていきたい。

地域連携フィールドゼミナール(小田ゼミ)成果報告

幼児教育における地域連携について

指導教員：小田真弓
ゼミ生：石井仁那、上田遥菜、小薮祐大、佐野友香、北端洸太郎、西田友理子、松本彩花、
森橋和奏、山本七海、横谷帆奏

1. はじめに

今年度は、昨年度に行ったアンケート「幼児教育における地域連携について」の結果と課題を基に、子ども達や地域の人々との連携活動を企画運営していくことを目的とした。具体的方策として、実際に幼稚園を訪問し連携を図ったり、地域活動である公益財団法人ボーイスカウト日本連盟泉南第 2 団と交流したりしながら知識を深め、より良い地域連携活動となることを目標にゼミ活動を行うこととした。

2. 研究方法

1. 幼稚園教育要領にあげられている地域連携について整理する
2. 地域社会から求められている就学前保育教育機関の機能や役割を考える
3. 保育現場における地域連携の現状や課題を学び、課題解決方法を模索する
4. 公益財団法人ボーイスカウト日本連盟泉州地区ビーバースカウト隊集会での活動を企画し、実践する
5. 実際の保育教育現場の地域交流の企画をする

※実地調査は、大阪府南部の泉南市立幼稚園にご協力頂きました。

3. 活動の内容

1. 昨年度の引き継ぎの内容から地域連携についての課題を分析する
2. 学生ができる地域連携について考える
3. 幼稚園教育要領における地域連携について調べる
4. 先行研究を調べる
5. 実際に行われている地域連携について調べる
6. 活動を企画し、実施する中で地域連携を図る(公益財団法人ボーイスカウト日本連盟泉州地区ビーバースカウト隊集会)
7. 実際に幼稚園に出向き、連携を図る
8. 現状の実態を知る
9. 1 年間のまとめ

3-1 昨年度行った、幼児教育における地域連携の展開の方法、その成果や課題、教員養成校の役割を検討するための探求的研究として、職員の地域との連携に関する意識について分析することを目的として実施したアンケートより、以下の 3 つの課題を考えた。

① 連携分野は多岐にわたるため、これらの価値ある取り組みの多くを追求しようとすると拡散的にならざるを得ないことから、地域連携の中で精選し、計画的に取り組む必要がある。
② 教育･保育は将来の地域を担う人を育てる観点に立って、学校･園と地域が無理のない共通テーマでつながり合う関係を作り出す必要がある。
③ 地域の人々や児童･生徒･学生との連携活動は園児のみならず相互の学び合いであり、その意識が真の交流･連携になることの相互理解が必要である。

これらの課題から、本年度は地域の人々や児童･生徒･学生との連携活動を行いたいと考える。

3-2 学生ができる地域連携について考える

一つ目は、zoom などを用いたオンラインでの交流会や懇親会を考えた。二つ目は、室内で活動するのは難しいため、屋外で行うレクリエーションや運動遊びを考えた。三つ目は地域の人と協力して作り上げるイベントを考えた。

実際には、ボーイスカウト日本連盟の活動の中に和歌山信愛大学学生によるブースをもたせていただいたところ、ボーイスカウト日本連盟泉南第 2 団さんより泉南市ライオンズクラブ主催のイベントへの参加依頼があり、参加することとなった。その後もスキーやキャンプ、スカウトリーダーの依頼もいただいている。

3-3 幼稚園教育要領における地域連携について調べる

連携先		内容
地域と家庭	前文	家庭との緊密な連携の下，小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら，幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導をする際に広く活用されるものとなること
社会生活との関わり	第 1 章 第 2-3(5)	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに，地域の身近な人と触れ合う中で，人との様々な関わり方に気付き，相手の気持ちを考えて関わり，自分が役に立つ喜びを感じ，地域に親しみをもつようになる。
教師	第 1 章 第 3-4(1)	幼児の生活は，入園当初の一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ，安定していく時期から，他の幼児との関わりの中で幼児の主体的な活動が深まり，幼児が互いに必要な存在であることを認識するようになる。
家庭	第 1 章 第 3-4(2)	入園当初，特に，3 歳児の入園については，家庭との連携を緊密にし，生活のリズムや安全面に十分配慮すること。
小学校の教師	第 1 章 第 3-5(2)	小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り，幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。
教育活動	第 1 章 第 3-6	各幼稚園においては，教育課程を中心に，第 3 章に示す教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の計画，学校保健計画，学校安全計画などを関連させ，一体的に教育活動が展開されるよう全体的な計画を作成するものとする。
家庭，地域及び医療や福祉，保健等の業務を行う関	第 1 章 第 5-1	家庭，地域及び医療や福祉，保健等の業務を行う関係 機関との連携を図り，長期的な視点で幼児への教育的支援を行うために，個別の教育支援計画を作成し活用することに努めるとともに，個々の幼児の実態を的確に把握し，個別の指導計画を作成し活用することに努めるものとする。

3-4 先行研究を調べる

①保育現場における地域連携保育の現状と課題　香﨑智郁子

保育現場において業務に多忙を極める保育者に対して、地域連携保育を積極的に実施していくことは厳しいため、地域連携保育を担当する人材確保する必要がある。そのために保育現場におけるコミュニティコーディネーターという人材育成の取り組みの促進と地域連携保育の内容を実施するために必要とされる専門性の明確化をする必要があるということであった。

②保育現場の地域連携事業-千葉市内の保育所等の実態調査から-實川慎子，高木夏奈子，栗原ひとみ，山田千愛，高野良子

地域連携事業の実施に際する課題は、園内に直接参入すると園児の安全、地域住民の安全等、配慮すべきことが多く園職員の負担が大きい。そのためは地域住民が直接園内に入らずとも、間接的に園内環境の整備に関わっていける連携のあり方も検討していく必要があるということであった。また、実施においては、地域住民や園職員の負担軽減が重要なかぎとなるということであった。

3-5 実際に行われている地域連携について調べる

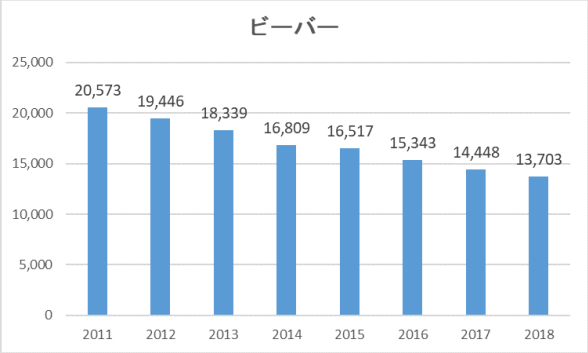
今回はビーバースカウト隊集会の地域連携に着目して学ぶ。地域の人々や児童･生徒･学生との連携活動のひとつであるビーバースカウトに焦点を当てて、調査を行うため、まずは、インターネット等を活用し、ビーバースカウトについて調べた。

･ビーバースカウトとは、ボーイスカウト活動における最年少の小学 1 年生から 2 年生を対象として、「みんなとともに仲良く遊ぶ」「自然に親しむ」「楽しみや喜びを分かち合う」などをねらいとして様々なことに挑戦する活動である。

･主な活動内容として、アウトドアクッキング等のイーティング、スカウトバザー、山登り、キャンプである。

・ボーイスカウト活動の現状として、毎日新聞の記事より、加盟する子供の数が 10 年間でほぼ半数の約 6 万 2000 人(2016 年度)まで減っていることが分かった。全国 34 道県で加盟者が 1000 人を割り、苦しい運営を迫られているところもあり、ボーイスカウト日本連盟(東京都)は「少子化に加え、部活動や塾との両立が難しくなり、国際交流や慈善活動をするＮＰＯも増えて差別化できなくなった」と危機感を募らせている。

・加盟員数の減少率



3-6　活動を企画し、実施する中で地域連携を図る

(1)調べたことから、ビーバースカウトの子ども達と一緒に行いたい活動を考え、3 グループに分かれて計画書の作成を行う。

・グループ 1 クッキング計画(白玉入りフルーツポンチ、わらび餅を作る)

・グループ 2 運動会計画(ダンス「エビかにクス」、徒競走、じゃんけん新聞、新聞玉入れ、○×クイズ、チーム対抗リレーなど)

・グループ 3 デザイン計画(T シャツ、トートバッグに手や野菜に絵具を付けてスタンプをする)

(2)子どもと遊ぶためのゲームを体験する。

(3)公益財団法人ボーイスカウト日本連盟泉州地区ビーバースカウト隊集会で行う活動の 1 つである「魚釣り」「ペットボトルロケット」に向けて、海の生き物、竿、ペットボトルロケットの製作を行う。

・紙皿、色紙、目玉シール等を使用して海の生き物の製作をする。

・木の丸棒、紐、磁石を使用して竿の製作をする。

・ペットボトル、牛乳パックを使用してペットボトルロケットの製作を行う。

(4)公益財団法人ボーイスカウト日本連盟泉州地区ビーバースカウト隊集会に参加し、ビーバースカウトの子ども達と交流を行った。

・魚釣りコーナー、水鉄砲の受付、補助等を行い、「みんなとともに仲良く遊ぶ」「自然に親しむ」「楽しみや喜びを分かち合う」という 3 つのねらいが達成されていたと感じたとともに、学校を超えた地域の仲間と遊び、必要なルールを守ったり、年上が年下の面倒を見たりする活動から、集団行動を身に付けることにつながっていると考えた。

・大阪南部である堺市、高石市、大阪狭山市、河内長野市、岸和田市、泉佐野市の多くの方との交流があったため、大学への通学可能な地域との連携活動は和歌山信愛大学の知名度を上げる機会となった。実際にインスタグラム等に「和歌山信愛大学の学生」として掲載していただいている。今回の交流は、ゼミ生だけが学ぶ機会となっただけではなく、大学の認知度を上げるための取り組みとしても効果があったと考える。

(5)泉南中央 LC　CN54 周年記念事業「ボーイスカウト泉南第 2 団による飯盒炊爨と森の散策」に参加し、ボーイスカウトの子ども達と交流を行った。

・開会式

・飯盒炊爨の用意(飯盒の組み立て、お米を水にさらす)

・信愛大学学生によるレクリエーション(戸外遊び)→無限ジャンケン列車

・スカウト隊長によるレクリエーション

→『ドレミの歌』手遊び、『手のひらを太陽に』手話歌、『猛獣狩りに行こうよ』手遊び
・昼食準備　・昼食　・昼食後　森の散策→砲台跡と火薬庫の洞窟を見学　・片付け　・閉会式

3-7 実際に幼稚園に出向き、連携を図る
(1)幼稚園より依頼(生活発表会や運動会などの行事をビデオで撮影し、それを編集して DVD を作成して欲しい)いただき、連携を図る。12 月 2 日(金)9:00～13:00 に泉南市立くすのき幼稚園。泉南市立文化ホールで行われた 5 歳児生活発表会に参加する。後ビデオ撮影を行い、撮影したものを編集し、後日幼稚園にお渡し、地域交流に役立てていただく。
(2) くすのき幼稚園での 5 歳児の生活発表会の撮影から学んだことは、園児同士が支え合いながら発表を成功させていたである。このことから、保育者が園児一人一人の性格や特性を理解していること、園児が地域の方たちとの交流を通して、クラスの仲間の姿と重ねられていたと感じた。園長先生の講話から学んだことは、主に 2 つある。1 つ目は、園区にある施設を知ったり、人と関わったりすることで、地域の目標「孤立しない、させない、支えあいのまちづくり」を達成させるための活動を大切にしていたということであった。2 つ目は、園児が地域の課題解決に一層意欲的に取り組むようになるということであった。

4.　おわりに
　次年度はコロナ禍において実施が難しくなっている地域連携活動ついて考え、信愛生と子ども達や地域の方々との交流の場作りや地域の人と子ども達が交流できる機会を企画、運営していきたいという思いを引き継いでいってもらいたいと思う。

5.　引用参考文献

・文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm 2022 年 12 月 7 日閲覧)
・文部科学省『幼稚園教育要領解説書』190 頁
・保育所保育指針解説書　243 頁　(https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900 000-Koyoukintoujidoukateikyoku/3_20.pdf) 及び、幼保 連携型認定こども園教育・保育要領解説書、261 頁 (https://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/youry ou_kaisetsu.pdf　2022 年 12 月 7 日閲覧)
・ 文部科学省『幼稚園教育要領解説書』181 頁
・文部科学省「教育基本法改正に関する国会審議における主な答弁」(https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/discussion/011611.pdf 2022 年 12 月 7 日閲覧)
・文部科学省これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)(中教審第 184 号)
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuk yo0/toushin/1365665.htm 2022 年 12 月 7 日閲覧)
・ 文部科学省「チームとしての学校の在り方と今後の改善 方策について(答申)(中教審第 185 号)」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuk yo0/toushin/1365657.htm 2022 年 12 月 7 日閲覧)
・ 文部科学省「新しい時代の教育や地方創生の実現に向け た学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)(中教審 186 号)」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuk yo0/toushin/1365761.htm 2022 年 12 月 7 日閲覧)
・高橋翠「コミュニティコーディネーターの役割と可能性 ―園を起点としたまちづくり・ひとづくりの「触媒」として」『発達』162 号ミネルヴァ書房 2020 78 頁
・香﨑智郁代　保育現場における地域連携保育の現状と課題九州ルーテル学院大学紀要 50 巻 49 - 54 2020
・實川慎子・高木夏奈子・栗原ひとみ・山田千愛・高野良子　保育現場の地域連携事業－千葉市内の保育所等の実態調査から―植草学園大学研究紀要 11 巻　41-51
・角間陽子・石橋恭子 「子どもと高齢者の世代間交流における実態と課題」 日本家政科学会研究発表要旨集 60 (0), 281-281, 2008

地域連携フィールドゼミナール（江口ゼミ）成果報告

本町・ぶらくり商店街の活性化に向けて

指導教員：江口 怜
ゼミ生：五百﨑駿、上野莉玖、小垣壮介、奥田愛斗、尾原沙都、喜多樹莉愛、北道奈央、北峯圭織
雑賀涼羽、芝紗采、滝尾有彩、辻陽名、辻岡桃、中尾伊吹、中村莉子、吉田季央

【はじめに】

本ゼミの活動範囲は、本町地区及びぶらくり６商店街界隈（以下ぶらくり商店街と略す。）である。過去２年間ではぶらくり丁の課題である、地域の活気がなくなっていることに対し、居場所づくりを行っていた。これらの活動を引き継ぐとともに、新たなる取り組みを行なった。2022 年度は以下の３つにグループを分けて活動に取り組んだ。

（Ⅰ）ほんまちえんがわはうす
（Ⅱ）ほんまち子ども食堂
（Ⅲ）ぶらくり商店街

＜ほんまちえんがわはうす＞

１　目的

グループえんがわが 2022 年 3 月に空き家をリノベーションしてオープンした「ほんまちえんがわはうす」の活動に協力し、子どもや地域の人々が、気兼ねなく訪れることができるような居場所になることを目指す。また、子ども食堂等でほんまちえんがわはうすを利用した人が、四季を感じたり、過ごしやすいと感じたりすることができる居場所になることを理想としている。そして、将来的に学生や地域の人々が気軽に立ち寄ることができる居場所になることを目指している。

２　実施内容

大きな活動としては、和歌山信愛大学の子どもフェスタの参加者の協力のもと、ほんまちえんがわはうすのガレージを、手形アートで色鮮やかにした。

【日時】
ガレージペイント　2022 年 10 月 15 日（土）

【当日のスケジュール】
12 時 30 分 ほんまちえんがわはうす集合、ガレージペイント開始
〈内容〉ガレージペイント
〈詳細〉・子どもに好きな色を選んでもらい、学生が手にペンキを塗る。
・好きな場所に、手形をつけてもらう。
・高い位置に手形をつける際、土台を置き、学生が補助をし、安全に行えるようにする。
・最後にゼミ生や先生方も手形アートに参加し、完成となる。

３　成果・分析結果

〇ガレージペイント

ほんまちえんがわはうすのガレージを色鮮やかで明るい雰囲気にすることができた。また、ガレージに「ほんまちえんがわはうす」の名称を入れることで、子どもフェスタに参加した人や、通りがかった人にほんまちえんがわはうすを知ってもらう機会となった。

しかし、現時点では、ほんまちえんがわはうすを知ってもらうことはできたが、そこで何が行われているかについては、まだ知られていない。今後、多くの人にどのような場所であるかを知ってもらい、様々な人が利用することを期待したい。

〇インタビュー

グループえんがわ代表、小林修治さんにインタビューを行った。内容は、以下の通りである。

①えんがわはうすは今後、どのような場所になってほしいと考えているか

・家庭、職場、学校とは違う、誰でも気軽に訪れることができる第三の生活の場所となることが理想である。

②今後、えんがわはうすで本格的に何か販売するか

・弁当を販売できるならしたい。コンビニが遠いため、近場ですぐに買えるようにしたい。

③行ってみたいイベント

・月一で寄席を行いたい。だれでも参加したり、人前で何か披露したりできるようにしたい。

④これからの学生との関わりの中で期待すること

・江口ゼミ以外の人にも知ってもらいたい。

・別の見方からの方法を教えてほしい。

・ゼミ以外で学生による学生のためのカフェなどを週一、週三などで運営してほしい。

・学生と積極的に関わりたいと思っている。

4　今後の課題

ほんまちえんがわはうすの目印（ガレージペイント）となるものを作ることはできたが、まだ、多くの人に存在や活動内容を知られていないことが現状である。そのため、イベント内容が書かれたチラシをスーパーや図書館などの公共施設に配布し、様々な世代の方々に認知してもらうことが今後の課題となった。

（文責：喜多、北道、辻、中尾）

＜ほんまち子ども食堂＞

1．目的

市民公益団体 Team MAK-e Spot（チームメイクスポット）が開催するほんまち子ども食堂の活動に協力し、多くの子どもたちが子ども食堂に楽しく意欲的に参加できるようにすること、また、子ども達が楽しめるように自分たちが主体となって企画を作ること。

2．実施内容

実施日	内容	準備	活動場所
2022 年 5 月 25 日（第一回）	輪投げ、絵本の読み聞かせ等	絵本を事前に準備する、輪投げの準備等	ほんまちえんがわはうす
2022 年 7 月 6 日（第二回）	短冊の製作、スーパーボールすくい等	短冊の製作等	ほんまちえんがわはうす、本町会館
2022 年 10 月 12 日（第三回）	マジックショーの練習、英会話等	マジックショーの練習をする等	ほんまちえんがわはうす
2022 年 11 月 16 日（第四回）	フードパントリー、ツイスター等	ツイスター等のルールの把握	ほんまちえんがわはうす
2022 年 12 月 7 日（第五回）	フードパントリー、ビンゴ、フルート演奏を聴く等	来客者の人数を把握し、それに応じた準備をする	和歌山信愛大学体育館

（子ども食堂の様子）

３．成果・分析結果

成果としては、全５回にわたる子ども食堂を通して数多くの子ども達や保護者の方々と関わることができ、そこから現代の子育てをされている保護者の方々の貴重な意見をお聞きすることができたり、子どもの興味を引く具体的な遊びや活動を知ったりすることができたことがある。

４.今後の課題・見通し

反省点として、見通しよい事前準備ができなかったことがある。私たちが子ども食堂の企画・運営に携わる中で、子どもと触れ合ったり、臨機応変に対応することができたりはできていた。しかし、来場予定の人数を踏まえた机や椅子の配置、保護者の方々の自動車を駐車する場所等の配慮が欠けていたと感じる場面があった。子ども食堂当日を明確に見据えるとともに、保護者の方々のニーズにもこたえるべきである。

（文責：小垣、奥田、北峯、辻岡、中村）

〈ぶらくり商店街〉

１．目的・課題

本ゼミでは、前年度のゼミ生の活動を引き継ぎ、ぶらくり商店街活性化を目指し取り組んでいる。その活動として、イベント企画「ぶらくりのすてき博物館」を開催するために、ゼミ生が学んだぶらくり丁の魅力ある歴史や店舗を伝え、多くの方々に興味をもってもらうきっかけになることを目的として進めた。

２．実施内容

ブレインストーミングを行い、ぶらくり商店街の課題や魅力を発見し、自分たちが目指す活性化を明確化し、実現のための活動内容を考えた。その結果、「ぶらくりのすてき博物館」を大学で 10 月 15 日に行われる子どもフェスタと同時に開催することとした。

イベント開催に向けて、和歌山市中央商店街連合会会長桑島英樹様をはじめとした商店街の関係者を訪問し、企画へのご協力をお願いした。

イベント内容は、大学の学生ラウンジを活用し、ぶらくりの概要や歴史などぶらくりに関する様々なブースを設置したり、商店街のいくつかの店舗から商品を販売した。

３．成果、分析結果、自己評価

〇ぶらくりのすてき博物館

オープンキャンパス、子どもフェスタと同時開催したことで、幅広い世代の方々にぶらくりの魅力を伝えることができた。しかし、ぶらくりへの直接的な集客には繋げることができなかったため、来年度ゼミではこれらの課題を達成できるよう期待していきたい。

〇インタビュー

協力していただいたぶらくり関係者の方々に報告とインタビューを行った。

インタビューの内容は、①ぶらくりの活性化に向けた現在の取り組み、②取り組みへの思い、③ぶらくりのすてき博物館の評価、④ぶらくりの今後の課題や展望である。

北ぶらくり丁商店街協同組合副理事長である平松さんによると、商店街全体としては、様々なイベント等を通して商店街以外の人を受け入れる体制を整えているそうだ。また、平松さん自身は、地域の方々にあってよかったと思ってもらえるような自分の店固有の魅力を考え続けていると話していた。

ぶらくりのすてき博物館への評価としては、本町公園が活性化されている現在、商店街に興味をもち、貢献しようという学生の思いが喜びであるとおっしゃっていた。そのため、私たちのゼミ活動だけに終わらせるのではなく、今後もかかわりをもち、活性化の実現に加わっていきたいと考える。

４．今後の課題

〇地域の課題

ぶらくり商店街は、現在若い人に足を運んでもらえるようなイベントを実施している。しかし、ぶらくり商店街は高齢化が進み、一人一人の負担が多く何十年も持続していくことが難しいと予想する。そのため、若年層に地域に根付いてもらうことが必要であるが、現在できていないことが課題と感じる。

（文責：五百﨑、尾原、雑賀、芝、滝尾、吉田）

【まとめ】

全体の成果としては、居場所を整備し、安全に安心して集まれるようにした。そこから居場所を知ってもらえるようにイベントを行なった。

今後の展望としては、幅広い年代の声を聞き、それぞれのニーズに合わせたイベントを地域の拠点であるほんまちえんがわはうすで行ったり、ぶらくり商店街に普段から足を運んでもらえるようにまずは知ってもらう活動をすることを次回のゼミ生に行ってもらいたい。さらに、これからもえんがわはうすやぶらくり商店街により人が集まるように、工夫を積み重ねていってほしい。

（情報提供者・協力者・店舗）

和歌山市中央商店街連合会会長・北ぶらくり丁商店街協同組合理事長　桑島英樹様

本町地区連合自治会会長　野間良美様

和歌山市役所本町連絡所所長　山本敦弘様

Team MAK-e Spot 三岩眞紀様

グループえんがわ代表　小林修治様

ブーランジュリーピノキオ、諏訪園茶舗、NANA 星てんとう虫カフェ（ぶらくりのすてき博物館）

和歌山ヤクルト販売株式会社、NPO サンマザー、土屋珈琲研究室（ほんまち子ども食堂）

（謝辞）

本ゼミの活動にあたり、ご協力いただいたご協力者、ご協力店舗の皆様に厚く感謝を申し上げます。

8. おわりに

2019年度に開設された和歌山信愛大学は、2~4年目にして新型コロナウイルス感染症によるパンデミックという世界規模の危機の影響を受けることになりました。とりわけ、地域連携を進める拠点となるきょう育の和センターにとっては、ソーシャルディスタンスが求められる社会状況の中で、試練の三年間となりました。

しかし、これまでの経験を生かし、本報告書をご覧いただければ、コロナ禍における困難を見つめながら、今だからできる地域連携活動に学生・教職員が共に取り組み、様々な試行錯誤を重ねてきたことをご理解いただけるのではないかと思います。今後の教育・保育現場で求められるのも、見通しのつきにくい状況の中で試行錯誤しながら最善の道を探り、協働しながら課題解決に向かうことができる力です。今年度のきょう育の和センターに関わる様々な取り組みを通して、学生たちがそのような力を獲得してくれたならば、喜ばしいことです。そして何より、このような状況下においても、学生に試行錯誤の機会を与えてくださった和歌山市、有田市、和歌山県をはじめとする行政の皆様、地域社会の皆様には、厚く御礼申し上げます。

今後も、和歌山信愛大学の研究と学生の学びの成果を地域のために役立てるため、きょう育の和センターとして全力で取り組んで参ります。

2023年3月31日　発行
きょう育の和センター長　戸澗幸夫
委　員　千森督子
秋吉博之
森下順子（編集担当）
辻　伸幸
江口　怜（編集担当）
坂本　匡
前島　美保（編集担当）

和歌山信愛大学
Wakayama Shin-ai University

和歌山信愛大学きょう育の和センター発行